

放送人の会

No.80

2018.2.9

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com
 発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、菅野高至 (HP担当)、逸見京子、前川英樹、松尾羊一 事務局 須斎恵美子

2018年、年頭の自問

放送人の会 会長 今野 勉

1. 「レベ」の苦悶

「とし最初の会報なので、テレビの将来とか、少なくともこれまでの歴史にまつわる話題を書こうと思案していたところに、某週刊誌の新聞広告が目にとまった。曰く『苦悶する「テレビ」に明日はあるか』※。

読んでみると、東京の民放4局の決算報告書がまず読み解かれていた。4局のうち2局は、営業利益の8割以上をテレビ放送事業で稼ぎ出しているが、他の2局は、不動産業等のテレビ放送以外の事業による営業利益が7割から8割を占めているという。実質的にはテレビ事業は本業ではなくなっているのだ。

本業のテレビ放送で大半の利益をあげている2局も、将来の事業リスクについて「テレビ広告収入Ⅱテレビ放送事業Ⅱへの依存」を挙げている。広告主からの広告費出稿がこの先減るだろうと予測しているのだ。

思い返してみると、2008年9月、アメリカ大手の投資会社リーマン・ブラザーズの経営破綻による一連の経済パニックまで、民放テレビ界には潤沢な広告費が流れ込んでいた。リーマンショックで打撃を受けた企業からの広告費が減るのは当然だったが、景気が回復しても広告費が元に戻っていないことを示すのが先述の民放4局の決算報告書である。なぜ戻らないのか。視聴者が減りつつあること、すなわち、テレビ離れ現象が進み、テ

レビの広告媒体としての

の価値が下がったからである。

なぜテレビ離れが起こったのか。問題はそこか、と私は身構える。

2. テレビ制作者は…

視聴者のテレビ離れに、テレビ制作者は責任があるか、と自問してみる。

これまで、テレビ離れの理由は、次のように言われてきた。①バブル景気時代に人々が夜、外出して遊ぶ癖がついたこと②女性の共働きや核家族化で日中家に誰も居ない日が多くなったこと③家庭用ビデオやゲーム機の普及でテレビ放送を見ない時間が多くなったこと。そして最近誰の目にも明らかになったのは、④インターネット時代に入り、パソコンや携帯電話（スマホ）が普及したため、テレビ受像機に向かう時間が、これらの新しい通信機器によって大幅に奪われたこと、である。

しかし、これらの社会現象や技術の進化は抗いようのないことであり、テレビの制作者が責任を負う問題ではない。

3. グローバリゼーション

数年前、テレビ局を担当する広告代理店の人に、こんな話を聞いたことがある。

リーマンショック後、日本の企業のおくは海外に工場や事業所を設けるようになった。

外国の労働者を雇い、外国の消費者に物やサービスを売るようになったのだ。日本の企業は、海外の企業と競争しなければならなくなった。勝ち抜くためには、合理化、効率化を徹底的に高める必要に迫られた。管理部門や開発部門に優秀な社員を集め、単純労働には賃金の安い非正規労働者を使うことが当たり前のようにになった。グローバルゼーションである。

広告代理店の人は、こう続けた。だから日本の大企業は、景気が回復して業績が上がって広告宣伝費が元に戻っても、その半分近くを海外で使うようになっていく。日本のテレビ局に往年の広告費を出稿することはもはやない。

その頃私は、非正規労働者について、ある大学のメディア研究者がこう話していたの思い出した。身分も収入も将来も不安定な非正規労働者は、テレビを見る精神的余裕を持っていないと思われる。

私が読んだ週刊誌の、もう一つの特集は『新・階級社会』 学歴・結婚・体格まで違うもはや「格差」ではなく「階級」日本の不都合な真実』であった。平均年収186万の非正規労働者が929万人（総就業人口の15%）いるという。

「グローバルゼーション」という言葉を聞いたのは、何時のことだっただろう。その時グローバルゼーションがテレビに大きな負の影響を与えると考えた人はいただろうか。もちろん私は考えもしなかった。

さて、2018年。私（たち）は、何を考えるべきなのだろうか。

※「週刊現代」2018・2・10号

新春所感

謹賀新年

池端俊策

放送人の会でグランプリを頂きましたが、みなさんのような見巧者に見守られて今日までやってこれたのだと思っています。大変感謝しています。今年もどうぞお元気で。

大山さんのこと

石橋 冠

昨年「断捨離」に目覚め、過去に自分が書いたものや資料などを容赦なく捨てる日々を送った。

だが、どうしても残ってしまうモノがある。30年ほど前、局命でアメリカへドラマの研修に行った時のレポートがそのひとつである。50日ほどLAやNYのドラマ制作現場を見学し、その結果をまとめたものだが、いま自分が読んで面白い。とりわけ、そのころ視聴率ドンピリだったNBCが、一年間でダントツになった『奇跡』に関する記述にワクワクする。

だが、この100枚に及ぶ報告書は局内ではほとんど関心をもちず、誰かが質問してくる気配もなく、いささか梯子をはずされた気分だった。そんな時、どこで聞き知ったのかTBSの大山勝美さんが訪ねてきた。「ぜひ、アメリカの話聞きたい」という。皮肉なこと、他局の偉い人の前で教時間にわたってレポート内容を語ることになってしまった。大山さんは熱心に質問をくださり、刻明にメモを取り、多くの意見もおっしゃった。大山

さんと面対してしゃべるなど想像もしていなかった。極度の緊張でカタマっていたが、とても嬉しかった。

その後、なにかとお付き合いをいただき、NHKの「新宿鮫シリーズ」、テレビ朝日の「兄弟」など、多くの大山勝美プロデュース作品の演出をさせていただいた。大山さんこそ恩人であった。畏敬がつのるあまり「どこかでお茶でも飲みませんか」と雑談に誘ったり、大山さんのオヤジギャグにも笑ったり、そのようなことができなかった。

いま頃になって、後悔しきりだ。

市岡家の本草学

市岡 康子

昨秋、長野県飯田を訪ねた折、飯田美術館で「江戸時代の好奇心」信州飯田・市岡家の本草学と多彩な教養」と題された図録と出会い、直系の祖先の17世紀半ばから曾祖父に至る系譜と事蹟を知ることになりました。長子が受け継いだ全資料を飯田市に寄贈し、平成16年に開催された企画展の記録です。

断片的にしか知らなかった全貌が明らかに、なり大いに興奮するとともに、ものがあるだけでなく、整理整頓されて記録に残すことの重要性に改めて気づかされました。

大阪から

市村 元

早いもので、大阪暮らしもまもなく10年目となり「地方の時代」映像祭も第38回を迎えます。地方の衰退や人口減少時代の課題が言われる中、地域からの発信を続けていくことの大切さを痛感しております。皆様の変わら

ぬご支援、ご助力をよろしく願います。

あけましておめでとついでにございます

浦谷 年良

小学生の時に70歳を超えました。年齢に相応しいペースでできる仕事に挑戦していきたいと思っております。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

自分なりの「老人力」を磨きたいと考えております。

エンドマークのない悲劇

荻野 慶人

僕は昭和8(1933)年生まれでこの1月末に85歳になった。北朝鮮拉致被害者の横田滋さんより2か月ほど若く、妻も奥さんの早紀江さんと同年配だ。

戦時中の幼少時に講談社の絵本『安寿と厨子王丸』(著者を失念)で、戦後の高校時代に森岡外の小説『山椒大夫』で、大学時代に溝口健二監督・田中絹代主演の映画で涙した。千年遡る平安末期の越後国(今の新潟県)の日本海海岸を旅する母親と幼い姉弟が、人買いに騙され親子離別するくだりから始まる悲劇だが、横田さんの愛娘・めぐみさんが1977年11月15日、13歳の時忽然と姿を消したのも新潟の海近くだった。

「拉致被害者家族連絡会」の代表を横田滋さんより2007年11月に引き継いだ飯塚繁雄さんの妹・田口八重子さんの起承転も「結」が曖昧で悲しい。大韓航空機爆破(1987年)を実行した北朝鮮の工作員・金賢姫に、日本語を指導した李恩恵と称する女性が八重

子さんと見られる。「田口さんが日本に残してきた二人の子に会いたいと嘆くのを見るのが辛かった」と彼女が語っている。

「厨子王恋しや ほうやれほ

安寿恋しや ほうやれほ」

佐渡の海辺に流れる哀し気な歌声が耳に甦る。歌うは失明の老奴隷(田中絹代)だ。

物語では、山椒大夫の莊園を辛うじて脱出した後、丹後の国司に栄達し一帯での奴隷解放を成し遂げた厨子王が、この歌声に導かれ母と再会できて暮を閉じるが、現代の拉致事件では、長男・飯塚耕一郎さん(32)は時にテレビで見ることがあるように健やかでも、母親の消息は知らされないままである。

めぐみさんか八重子さんの手を取り軍事境界線を突破する、僕が正義の味方の初夢を見たこともあるが、現実はずる者国家の方角を睨むだけで何もできない非力が口惜しい。悲劇喜劇を問わずエンドマークを見ずして、新しい元号も東京五輪も心から喜べない。

志を受け継ごう!

加藤 浩紀

私の最も尊敬するジャーナリスト原寿雄さんが昨年11月に亡くなりました。原さんは元共同通信編集主幹で、活字ジャーナリズムの世界で活躍した人ですが、テレビに対しても驚くべき洞察力を持ち、何よりも、優れた番組の制作者には深い愛情をもって接する人でした。それだけに、テレビを大事にしない放送人や経営者を、辛らつな言葉で遠慮なく批判していました。

2000年に、NHKと民放連共同の第三者機関・放送番組向上協議会(現BPO、私

は当時その組織の専務理事を務めていた)が「放送と青少年に関する委員会」を立ち上げた時に委員長を引き受けていただきました。委員会は初年度に原委員長を中心にさまざまな議論を重ねた上で『パラエティー系番組に対する見解』をまとめて公表しました。その一部を紹介しますと…

「パラエティー系番組で問題とされるシーンも、小劇場で特定の客を対象にしたものであれば許されるであろう。しかし、公共性の強いテレビでは、番組全体の文脈から、その表現の必然性が納得されない限り、職場、学校、街中など、多くの人たちが出入りする公共の場所で見せることが社会通念として許されない行為は扱うべきではない。人を笑わせ、楽しませることを目的としたエンターテインメント番組であっても当然公共性の強い制約を受ける。」

さて皆さん、最近のテレビ番組を思い出してください。

一糸もまとわないタレントが局部だけをお盆で隠して演技するシーンをよく見かけますが、その姿で職場や学校や街中に現れたら、社会通念として許されるでしょうか。明らかに、「見解」の趣旨を大きく逸脱した表現がテレビの中でまかり通っています。念のため確認しておきますが、委員会がこの「見解」を発表したとき、民放連もNHKも「見解」を真摯に受け止め放送倫理の向上に努める」と約束しました。

「見解」発表から十七年。初心忘るべからず。原さんら有識者の委員の皆さんが心血を注いでまとめた「見解」を、現役もOBも含めテレビ関係者全員がもう一度熟読し、その

志を受け継ぐことが必要だと思います。

(放送と青少年に関する委員会は現在BPOの中の委員会として活動しています。「見解」はBPOのHPで見ることが出来ます)

がしゅん

北村充史

妻が病氣(肺MAC症)と、その母(白寿)が施設ぐらしというわけで、しばらく京都で暮らすことになりました。京大正門から徒歩5分あまりの鴨川べりです。ウォーキング(トニス押し)で動きまわるのは昔なつかしい街ばかりです。しらべものや会報の原稿はできますのでどうぞお申しつけください。

吾八十有五ニシテ、心ノ欲スルト

コロニニ從ヒテ矩ヲ踰エラレズ

北村美憲

思い起こせば、学問に限ったことではなかったが「よし、これからだ」という気持ちになつたのは、大日本帝国が敗北・降伏した十三歳の時。そして「而立」(これで一人前だと自信を持ったのが二十九歳だったから、その段階では孔子サマより一、二歳早かった。

「不惑」(恐いもの知らず)はほぼ同じ年輩の頃のようにだったが、「耳順」(聞いたことに本気で腹が立たなくなる)には七十過ぎまでかかり、右に挙げた通り、孔子サマが七十歳で到達された「從心」には十五年の遅れをとりました。しかも「踰エズ」ではなく「踰エラレズ」であることに注目。「こえなくなくなった」達観・安堵の境地にあらず。本心は、こえて羽目を外したいのにそれが出来ないもどかしさと憤懣なのです。

まことに凡夫の煩惱がぎりなし。皆々様もどうかお元気で。

教育専門局研究

木下浩一

私は現在、商業教育専門局について学術研究を行なっております。具体的な研究対象は、日本教育テレビ(現テレビ朝日)と日本科学技術振興財団テレビ事業本部(後の東京12チャンネル、現テレビ東京)の教育専門局、そして毎日放送テレビ・読売テレビ・札幌テレビの準教育局です。ご存知のように、各局は後に一般局化しますが、本放送の最長は、日本教育テレビの15年弱(1959-1973年)でした。

教育専門局は長期にわたって批判を浴びました。そもそも教育局が誕生した背景には、「二億総白痴化」に代表されるテレビ批判があり、また同時に、日本国内における教育熱の高まりがありました。

教育専門局への批判は、端的にいうと娯楽化でした。例えば、日本教育テレビは「教育」53%、「教養」30%という編成比率が義務付けられていましたが、この量的規制の遵守が問題となりました。つまり、「娯楽」に分類すべきものを、「教育」や「教養」に恣意的に分類しているのではないかと、いうのです。教育専門局に対する批判は、アカデミックやジャーナリズムだけでなく国会でも議論されており、国家レベルでの議題となっていました。いわゆる「番組調和原則」の問題です。

一方で送り手は、多くの方策を生み出しました。スポーツ中継や海外テレビ映画における解説の付加、あるいはニュースショー(後

にワイドショー)という形式です。

資料上の制限はありますが、今年論文として刊行されるよう尽力しようと思えます。

六方を踏む

小池勝次郎

2018年正月、歌舞伎座を家族で訪ねた。高麗屋三代襲名披露の寿初春大歌舞伎の総見である。松本幸四郎改め二代目松本白鸚、市川染五郎改め十代目松本幸四郎、松本金太郎改め八代目市川染五郎が、名跡をそれぞれ同時襲名した。

歌舞伎十八番の内の一つ「勸進帳」は、高麗屋代々の幸四郎の当たり役といわれる。源頼朝の追手から奥州に逃れる義経、弁慶一行の安宅関での一幕であり、私が大好きな舞台でもある。先代幸四郎は、この弁慶1100回以上も演じ、2008年10月には1000回達成の奈良東大寺奉納公演に、ご一緒させていただいた思い出の演目である。そして今回、新幸四郎が挑む念願の弁慶は、凛々しく力強いスケール感で熱演する。最後の花道で豪快に挑む「飛び六方」に、高麗屋に脈々とつながる伝統と将来への勢いを感じた。

松本家とは、親しくお付き合いをさせていただいて久しい。華やかな襲名口上が終わった幕間に、新白鸚の楽屋を訪ねお祝いの会話を交わした。37年前10月の初代白鸚襲名時には、楽屋でサインをいただき絶筆となった思い出が懐かしい。新白鸚とは、1988年昭和天皇の吐血後に制作し崩御特別番組として放送した「昭和史と天皇」(6時間作品)のナレーションを数日かけて収録、ともに激動の時代を振り返り終焉を共有した。

平成は30年を経て、天皇の生前退位を迎えようとしている。そして今年、明治維新から150年。大政奉還して新国家を夢見た土佐の志士坂本龍馬が暗殺されてから150年が過ぎた。少子高齢化の波が押し寄せる昨今、地方創生が叫ばれて久しい。故郷高知県も、地産外商や移住促進事業に力を入れ、幕末維新博を企画し観光地への誘客と活性化を図る。昨年来、地元テレビ局等の協力要請で、高知県のイメージアップや全国的な広報展開への検討を行なっている。わが故郷に今一度、あの「飛び六方を踏む」がごとく力強い勢いがよみがえることを切望する新春である。

我が家の神棚 河野尚行

数年前からマンションの我が家の前に門松らしきものを飾る。1本500円の松の枝を2本花屋さんで求め、針金で扉に括り付け、これも買った御幣を年神様の依代として添える。

柳田国男の「祖先の話」によれば、正月に訪れる年神様はそれぞれの祖霊神であるという。マンションの我が家には仏壇はあっても神棚はない。我が祖霊神は玄関先で止まったまま、家の中まで入れなかったに違いない。

私のふるさとの神社は諏訪湖畔にある諏訪大社の分社の一つである。山から巨木を伐り出し、それを神として建てる御柱の神事や、周囲に数多くの縄文の遺跡や黒曜石の遺跡があるところからも、諏訪神社の起源は伊勢神宮よりも遙かに古く、縄文時代からの日本人の信仰を色濃く残していると勝手に思い込んでいる。

アマテラスを祭る伊勢神宮は弥生時代からの水田稲作の豊穣を祈る神社でもあり、古事記や日本書紀が描くアマテラスの天の岩屋の神話には馬やニワトリが登場して大きな役割を演じている。ニワトリは稲作と共に弥生時代に定着して日本列島にやって来た。馬の登場は更に新しい。3世紀中ごろの日本を描写した魏志倭人伝の記述には、日本には馬はいないとの事。事実、古墳から馬形埴輪や馬具類、馬の骨格が発掘されるのは5世紀も半ば過ぎの遺跡からである。一方、今年の千支のイヌは、日本列島には1万年以上前の縄文初期から登場する。

何を言いたいのかというところ、日本国家の出发点になる高天原以降の神話の舞台は、さほど古いものではないという事である。せいぜい4〜5世紀にしか遡れない。そして為政者はいつの時代でも自分たちを権威づける神話とその装置を必要としたという事である。闘いが激しかった中世から戦国時代にかけては、戦いの神、軍神としての八幡神社が日本各地に広がった。

そして、明治維新を迎え、国家が戦争を営むシステムの一つとして、東京招魂社を靖国神社に昇格させている。明治12年の事である。この国営の靖国神社には戊辰戦争での長州藩士の霊は祭られているが、西南戦争の西郷隆盛をはじめとして薩摩軍の霊は合祀されていない。

戦争が出来る国家を目指す政治家たちは、今年も靖国神社を礼拝しなければならぬだろう。私は、今年のうちにはマンションの部屋の一部に小さな神棚を設け、来年からは縄文以来の祖霊神を家の中で迎えることにし

よう。

遺跡が物語るには、縄文時代には集落間の多少の争いはあっても、相手をせん滅させるほどの争いはなかったという事だ。

コレクティブハウス15年

坂元良江

今年「コレクティブハウスかんかん森」は創立15周年を迎えます。まだシニアする暮らしが話題になる30年近く前から、本業のテレビ番組制作の仕事と並行してコレクティブハウジング実現に関わってきました。日本第一号ということでメディアや研究者の注目も集め多世代コレクティブハウスかんかん森は元気で。

去年暮れに参議院の「憲法審査会」を傍聴しました。私たちは2世代、夫と息子たちを戦場へ送ることはありませんでした。孫たちの世代に平和憲法を手渡すために、今年は大変な年になると覚悟しています。

幸いとても元気になっています。

今年もどうぞよろしくお願ひします。

現場制作

新山賢治

巡り合わせでしょうか。還暦を過ぎて現場に戻り番組を直接製作する機会が増えました。

一昨年はかねてから考えていた「23年前のカンボジア文民警察官PKO活動」の企画を現場が拾ってくれた。かつて地方局で私がプロデューサーをしていた頃の新人が制作統括となり、中堅ディレクターが中心となり取材に走り結実した。昨年は、60歳代の私を長老

に下は20歳代まで4世代がチームを結成し「インパール作戦の全容」に迫った。その制作は、緊急報道番組を二気に作り上げるのに似ている。一人のディレクターがじっくりとテーマを追う制作方法とは対極にあるのかもしれないが、チーム編成で制作するという形の中では、脇役として60歳を過ぎた高齢者も十分持ち味を発揮できると実感している。

とんでもない方向に世界が動いてしまっているのではないかと、という予感が迫る中、時代を傍観するだけではいけない。人生に定年はない、放送人にも定年はない、常に現場の視点をもち続けたいと、青臭く自分を鼓舞している。

それぞれの世代がそれぞれの特性を生かし即興音楽を奏できるように、日々目まぐるしく過ぎていく情報の渦に手を突っ込んで、見落としてはならないテーマを一つ一つ救い上げて、一緒に「落穂ひろい」をするような心意気を大切に調査報道に関わってきたい。

「尚、足るを知らぬ」諸氏へ！

鈴木典之

藤沢周平の長編小説の中に、主題に関わる印象的な2つのエピソードがある。『「屋清左衛門残日録」の中の隠居日記の二節「日残りて昏るるに未だ遠し」と、『風の果て』の功成った主人公の独白「尚、足るを知らず」だ。暮れの書架整頓の際、この箴言に再会、一連のフレーズのように朗唱してみたら、忘れかけていた記憶が蘇った。

思い起せば、20年前、創立間もない当会

に入った動機が、このエビグラムへの思い入れだった。

会社勤めを潮時とみて辞めた際、一方では当時愛読していた周平作品で出会ったこの二つの言葉のことも「昏るるに未だ遠し」と感じられるこれからの日々、心の内では煙り続けそうな「尚、足るを知らぬ」思いの始末をどうつけたものかと迷い、そこそこの世間と繋がれそうな「場」として当会を選び、加入させてもらったのだった。余生を面白く充実できそうな新鮮な雰囲気は当会に発散させていた。押しつけないゆるやかな連帯を基本にしながら、個々のボランティア意欲を社会還元する実践力。それはいまも維持されていて、小生もそのレールの上でほどほどに積極的に振る舞うことで、会を好ましいコミュニティとして楽しむことができた。会への愛着は深い。

さて、加入者も増え、形も整って、会も運営上ほど良い新陳代謝も必要と思われるが、気がかりな点もある。会員相互、殊に新旧会員間の交流の場が乏しいので、以心伝心の美風も生かしくい。会のなかに魅力なのかもお互いどう関わりたいのかもわかりにくい。このままでは会の求心力にも響くだろう。折角の宝の持ち腐れになってほもつたいない。かつての小生と五十歩百歩の心境の諸氏よ、居られたら先ず以って自己主張されてはいかか。事務局は充実し、なんであれ、気配りよく親切に対応してもらえらる。

小生、日残りてと思ひ込んでいたが、このところの調子では昏るるに近い気もする。年頭の偶感のつもりが連言になりかねない。

2018年正月

鈴木嘉一

年の瀬は締め切りが迫る原稿を2本抱えていたため、賀状が遅れました。NHKの受信料制度をめぐる最高裁判決の論考と、「夢千代日記」(花へんろ)などで知られた脚本家・早坂暁さんを悼む原稿は、合計で40枚(400字詰め換算)近くになりました。

昨年もまた、あわただしい1年でした。読売新聞の放送時評欄や放送の専門誌などで番組評、評論、レポートを執筆する一方、放送倫理、番組向上機構(BPO)の放送倫理検証委員会委員としてTBSの情報番組「ビビッド」のホームレス報道に関する意見書を担当しました。仕事で福岡市や福島県飯館村、高松市、韓国・仁川市、長崎県諫早市を訪ね、旅の気分も味わいました。

私事では、母の随筆集を私家版で刊行し、ささやかな親孝行ができました。故郷である千葉・房州の暮らしや戦争体験は、わが子の世代にも語り継いでいきたいものです。妻の菜穂子は「大人の塗り絵教室」の講師を続けています。入籍を済ませていた長女香奈子が昨秋、式を挙げ、名実ともに「増子」姓になりました。

今年も、取材が遅れがちだった次回作のノンフィクションに本腰を入れるつもりです。お互い、いい年でありませう。

迎春

田原茂行

「放送人の会」のお役に立てず申しわけありません。リハビリ生活5年目に入りますが、90歳台の方々の元気に励まされながら運動

を続けています。

新春恒例シジ川柳

田中秋夫

喜寿になり年金カットじゃ喜ぶぬ
(昨年9月77歳に。下流老人増やすな！)
もりとかけ狐と狸でそは尽くし
(安倍のそば店大繁盛、お友達になりたい)
官僚は損か得かで付度し

(国税庁長官に出世！Sさん旨くやったね)
選良は議員のことか？ち・が・う・だ・ろ
(選良って言葉は死語だろ。このハゲ！)

前原ドン小池にはまつてさあ大変
(責任は取りません「言うだけ番長」です)
市場どっち？アウフヘーベンしようがない
(哲学用語「止揚」なんて使っちゃつて)
ランプのビジネススーツはロケットマン
(お陰で儲かりました。金様はカネさま)

お後がよろしいようで……

あけましておめでと〜ございま

す 千葉 邦彦

昨年より、一般社団法人放送人の会の一員として活動しております。NHK、民放、制作プロダクション等出身の先輩方の聲かけし、実り多い時間を過ごしています。

月刊『通信文化』(発行:公益財団法人通信文化協会)に連載しているエッセイ「放送の100年〜1920〜2020」で、
1、放送博物館の収蔵庫に眠る放送機器類を技研に移管し、意味づけをして公開する(「放送技術博物館」構想)

2、放送博物館は「文書アーカイブ」に再構築する

3、放送センター建て替え期間中休館するスタジオパークは東京タワーまたは東京スカイツリーで臨時に事業展開する
のはどうだろうか、と提言しました。
本年もよろしくお願ひ申し上げます。

というのが今年の年賀状です。会報で紹介いただくにあたり、補足説明をします。

1、NHK技研には200人を超える優秀な研究者がいます。彼らの取り組んでいる未来の技術とは異質かもしれませんが、古い放送機器類はそれらに再び光を当て、意味を与え得る環境に置くのが適切だと考えます。そして、過去から未来までの放送技術の成果を一元的に展示すべきであると思っております。

2、放送博物館は放送文化研究所附属の研究機関としての本来の役割を十全に果たすべく、計画的な資料収集・分類・分析を図らなくてはなりません。それには能力ある司書・アーキビスト・学芸員が必要で、何よりも、志の高い管理者の存在が大前提です。そして、NHKアーカイブス(映像・音声資料)、日本脚本アーカイブス推進コンソーシアム(脚本・台本)、放送人の会(オーラルヒストリー「放送人の証言」、などの連携も重要となります。「放送100年」(世界的には2020年がそれにあたる。日本では2025年)も視野に置くべきでしょう。

3、スタジオパークは放送博物館とは役割を異にし、放送の「いま」を分かりやすく伝えることを目的としたエンターテインメント性に富む有料施設です。昨年度の入館者数は

約60万人。これは放送博物館(無料)の約10万人の6倍にあたります。これに比べて、有料入場者数だけで東京タワーは年間約250万人、スカイツリーは約450万人、スカイツリータワー全体では約3140万人という桁違いの数字です。費用対効果が飛躍的に高い事業設計が可能ではないでしょうか。

これらはいくまで私案ですが、実は「さらにその先」および別のアイデアも考えており、一部は公表しています。ご関心があれば、ご連絡ください。

ご意見・ご助言をいただければ幸いです。(元NHK放送文化研究所・NHK放送博物館)

迎春

塗り直す仕出しの顔に晩夏光
鶴橋康夫

一夏を京都の太秦で過ごしました。今年公開の東宝映画「蚕とり侍」の撮影でした。阿部寛さん主演のエロチックな時代劇です。5月18日公開です。

よい年でありますように。

ゆつたり のんびり

中嶋清栄

放送人の会のご案内を頂きたびに「伺いたい!」と思いが失礼しています。今年も有害化学物質過敏症をテーマに番組をつくりたいと願っています。でも、民放にいて、とてもとてもむずかしい…

初夢や方舟にまた乗り遅れ

新村もとを

年頭所感

深尾隆一

かつて放送と通信の融合という言葉が喧伝されたことがあった。今、娘の家にあるLG製の50インチ4Kモニターのスイッチを入れると、まずメニュー画面にYoutubeをはじめ様々なプラットフォームが表示され、地上波・BS放送はその中のひとつに過ぎない扱いをされている。融合どころか完全に取り込まれている。変化のスピードには呆然とするほかない。

そのうちインターネット上の「自由な報道」や見解の表明が、同一画面で覇を競うことになるのだろうか。そんな状況になったとして、既存の放送局はどのような道をとればいいのか。

公平原則が廃止された米国では放送局が次第に党派性を強め、それがメディアへの信頼を低下させている、という見解もある。

放送法第4条は公平性原則を標榜している。これは政府と放送局の間で双方の武器と成り得る二面性を持つているようだ。政府は放送局が「偏向している」といい、放送局は「自律性こそが客観性を担保している」とする。

私は思う。放送は異なる見解に対して謙虚な姿勢を保ち、常に自らの報道の客観性を検証していく為の道具として、また結果として自由な見解を表明することが可能なネット空間の中で不動の位置を保って視聴者の信頼をつなぎ止める支柱として、放送法第四条の精

神を堅持すべきだと。

自由な見解の表明は容易に他者への不寛容に堕ちる。寛容であると同時に常に自己を律して行く厳しい姿勢を維持していくことが、今こそ必要なのではないだろうか。

新年にあたって、個人的にも一瞬立ち止まり、急速なスピードで動く社会で流されない様、自分自身を見つめてみたい。異なる見解に真摯に耳を傾ける寛容性を自己のテーマとしたい。

希望ということ 堀川とんこ

去年は、秋から年末にかけて体調を崩した。住まいを神奈川県湯河原に移した直後だったので、いろいろと不便も生じた。都心へは電車を通うことにしたはずだったが、体力が落ちていてこれがかなりの負担になることがわかった。ついつい湯河原に閉じこもることになった。

当面の仕事や身辺の雑事から解放されてジツとしていると、心を占めるのは不思議に世界の様相である。分断と差別、格差と貧困、悪と熱狂が世界を覆っていると思える。日本も実は危うい。アメリカ一辺倒、トランプべつたりは怖いだけでなく、世界に向かって恥ずかしい。日本が世界に誇れるものは、新幹線や原発の技術輸出ではなく、平和憲法だろう。トランプに引きずられてこれに手を付けるのだろうか。希望の持てない新年になった。

臥せっていて書棚の本が目に入った。「憲法」という希望。若い憲法学者・木村草太と国谷裕子の対談を収めた憲法入門書だ。買ったき

り読んでなかった。えつ、今の政治状況は憲法の危機に陥るだろうか?というところという訳で、これを読んだ。世界のあらゆる国で、憲法の歴史は憲法違反のオンパレードだという。しかしその度市民は声をあげて権力の暴走を正した。世論調査に興味深い数字が出ていると国谷がいう。改憲論議が現実味を帯びてくるに従って、憲法改正は必要ないと考える人の割合が増えてきている。木村が答える。改憲の内容を吟味すると、提案のあやしさに気付くということだ。議論が高まってくると、国民は内容を精査し、合理的な判断をするようになる。なるほど、そうありたい。

明治憲法の時代を君主制とすると、日本はいま第一共和制の時代を歩んでいる。ここでは復古派が生き残っていて復古の機会を狙っている。ナチスを生んだワイマール憲法下のドイツ、ナポレオンによって崩壊したフランス共和制。第一共和制はもろいものを含んでいる。日本の共和制はまさに試されようとしているが、われわれ次第で、希望がないわけではないようだ。

明治維新百五十年をどう読もう

前川英樹

今年には明治維新150年、官製のイベントや情報が多く出てくるだろう。であればこそ、「ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書」は読まれてしかるべきだ。今年最初に読んだ本だ。今まで、読み損なっていた。やはり名著というべきだ。1月13日の朝日新聞で東北大学の赤坂憲雄氏が取り上げていた。日本近代の屈折と多層性が見えてくる。

その編者石光真人の父石光真清の手記4巻「城下の人」「曠野の花」「望郷の歌」「誰のため」も、日本近代の地下水脈に触れるという意味で再読したい。そこには、近代東アジア史の始点が記録されている。この本を知ったのは谷川雁の「城下の人覚書き」を読んだからだが、当時その初版（昭和33年）の単行本は絶版で古書店でも見つからなかった。勿論ネット検索なんてなかった。昭和53年に公文庫で再刊された時にすぐに買い、ドキドキしながらページを繰ったのを覚えている。随分以前にNHKラジオで森繁久彌が朗読していたような記憶があるが、確かではない。

明治維新の屈折を言うのなら、山田風太郎の明治モノは外せないが、なかでも「幻燈辻馬車」は傑作。ここから私の風太郎読みが始まったのだ。「司馬遼太郎史観より、山田風太郎史観を採る」と言ったのは、村木良彦さんだった。

ここまで来ると『敗者』の精神史（山口昌男）や、読み止しのままになっている「明治の表象空間」（松浦寿輝）にまで手を広げたいところだが、前者は2段組500頁、後者は700頁の大著だ。そんなに読めるだろうか。正月明けに酔眼朦朧、書架を眺めて呆然としている。

ところで、テレビは明治維新150年をどうするのだろうか。

人生百年時代のもう一度、春

三原治

「人生八十年」を春夏秋冬に譬えると各季節二十一年。春の初々しさ、夏の熱さ、秋の落

ち着き、冬の渋さとそれぞれの良さがある。私事だが昨年、還暦を迎えた。いよいよ冬である。人生の仕上げの季節だ。なんて思っていたら、近頃流行のフレーズが「人生百年時代」。英国ロンドンにあるビジネススクールのリンダ・グラットン教授らによる「ライフシフト100年時代の人生戦略」（東洋経済新報社）という著書が始まりらしい。

2007年生まれの子どもの半数は、107年以上生きると予想されているのだとか。安倍政権の「人生百年時代構想」には、胡散臭さを感じなくもないが、平均寿命が延びるのは悪いことではない。何をして、どう過すかは大事なことで、人生百年時代の就業は、八十歳となる。「放送人の会」はすでに人生百年時代を先取りしている。生涯現役の諸先輩方ばかり。来るべき超高齢化社会の生き方のサンプルがここにはある。

そうなると、春夏秋冬の次を考えなければならぬ。もう一度、春に戻る。最初の春とは違ふ二度目の春として、悟りはどうだろうか。私、また冬に差し掛かったばかりなもので、そんな未来の事は想像もできませんが。*****

紅白歌合戦から芽生えた妄想

村上雅通

大晦日恒例の「NHK紅白歌合戦」を数年

ぶりに見た。例年、すき焼きを腹いっぱい食べ、飲めない酒を嗜んで早々に寝てしまうのだが、今回は酒を飲まなかった分就寝が遅くなったからだ。事前の報道で分かっていたが、知っている曲も、共感できる曲もなかった。家族に付き合っつて視聴したが、30分ほど

で眠気がさしてきた。

なぜ共感できないのか改めて考えてみると原因がわかった。メロディアスな曲が少なかったことだ。かつての紅白には心に染み入るメロディーが溢れていた。しかし久しぶりの紅白は、リズムが際立つ曲が目立った。歌い手のリズム感も、かつての紅白とは比べ物にならないくらい向上しているし、演出も見事だ。しかし、私が見た、30分の紅白から音楽の感動は芽生えなかった。

クラシックの世界では、メロディーは20世紀半ばで限界に達したという話がある。ロマン派に代表される甘美なメロディーは使い尽くされたという。確かに、20世紀の半ば以降の「現代音楽」には、複雑なリズム、ハーモニーが際立つ。しかし、そうした現代音楽の多くは消え去り、古典派、ロマン派の音楽が残った。

歌謡曲やポップスの世界もクラシックと同じ軌跡をたどっているのかもしれない。このところ、テレビ番組を見回すと、CMにはモーツァルト、ブラームス、チャイコフスキーの馴染みの曲が使われ、暮れの全日本フィギュアスケート選手権では、ブッチーニ「トウランドット」「蝶々夫人」など定番に加えて「セピアの理髪師」といった「新入り」のオペラが選曲されていた。「やっぱりメロディーだよな」と妙に納得したものだ。

「もしかすると、将来の紅白もメロディアスな曲が主流になるかもしれない」と私は、新年早々そんな妄想を抱いた。たぶん、今の音楽についていけないオヤジのひがみなのだろうが…。

言葉の力

吉田賢策

ピリオオバトル…もうご存知でしょうか。最近開発された本の紹介ゲームで、5分の持時間のなかで順番に本の魅力を紹介し、チャンプ本を決めます。小説、新書、絵本…ジャンルは問いません。本の文化の衰退阻止にと、新聞社や書店などの後押しを受けて急速に普及し、年末には大学生の、新春には高校生、の全国大会が開かれたばかりです。我が地元横浜青葉区でも脳の活性化と発表能力向上にと急速に浸透、主婦からお年寄りまで熱くなり、自分も体験しています。年末の忘年バトルでは、大阪西成区の再生を経済学者が手掛けた本がチャンプ本に。ワイン片手に様々な話題に花が咲きました。「人を通して本を知る。本を通して人を知る」これが精神です。それでは「人を通してテレビを知る。テレビを通して人を知る」ことはどうでしょうか。

昔は番組やテレビの在り方について日常的に議論することが多かった気がします。勿論自身局を離れたこともありませんが、一般に薄くなった気がします。しかしやはり活字やネットよりもナマの情報は話が膨らみます。素晴らしい先輩から気鋭の新鋭まで250名余の放送人。我々は千代田放送会館という事務局かつ素晴らしい社交場をもっています。もつと気楽に立ち寄って会話できるといういですね。幸いイベントに追われることが少し減りました。勿論5分という時間制限は必要ありません。安らぎの空間の中で、もつとテレビ論メデイア論はいかがでしょう。

狂言のたくらみ ドラマのたのしみ

しみ
渡辺紘史

「こ」数年、私の知る児童劇団の「クリスマス劇」と、畏敬する大先輩が演じる「狂言」を観劇し、新年に向け気を新たにしているのが暮れの通例となっている。その狂言、今回は「月見座頭」、聞くも観るのも初めての演目であった。

話はこうである。都人が風月を愛でる中秋の夜、月を見ることのできない座頭が野辺に鳴く虫の音を楽しんでたところに、男が声をかける。二人はお互い歌を披露しあい、笑い打ち解け、男が持参した酒を上機嫌で酌みかわし、歌を詠み舞う宴となり、やがて二人は、よい時を過ぎたと言って別れる。ここまでは楽しく、しみじみとした味わいである。ところが、結末は意外な展開となる。去りかけた男は何を思ったか、立ち戻り、声音を変えて別人に成りすまし、座頭を突き倒し、杖を奪い放り投げ、助けを求める座頭を放り出し、立ち去るのである。座頭は、最前の人に引きかえ、世には非道い人もいるものだ、その心を語り、大きな「くっさめ」||くしやみをして、ひとり杖をつきながら去ってゆく。男がなぜ変心したのか、なぜ悪行に至ったのか、何も明かさず、舞台は唐突に終曲となり、観客は突き放され、しばらく間があつての拍手となった。私は座頭がコツコツと檜板に杖の音を響かせながら揚幕に消えていくまでの間、なぜ座頭が酷い仕打ちを受けたのかを考えていた。

非道な扱いを受ける座頭は、勿論ただの盲

人ではない。座頭とは琵琶法師の称号に由来し、江戸時代は障害者保護政策として、盲目者の座(組合)が公認され、一定の特権が与えられ、音曲の作者演奏者あるいは鍼灸師としての生業を保護され、中には高利貸業者になるものもあつたという。したがって江戸の庶民たちは、彼らに対し単純な同情だけではなない複雑な感情があつたとみてよく、反感や加害の意識は当時の現実の反映であり、滑稽さと風刺や批判を重視する狂言では、座頭は格好の素材であつたのだろう。解説によると、この狂言の眼目は、ジキルとハイドのように異なる二面性が人間にはあり、人間の表と裏、光と影、建前と本音が寸時に切り替わって表出する人間の業や心の深奥を象徴する一種の不条理劇とみればいらしい。時の権力者が寵愛し手厚くもてなしていた相手を、自分の身を危うくする存在とみなしたとたん、掌を返すように監獄に送り、この世から隔離してしまうようなこともある、いかにも今の世にこそふさわしい話ではないかと、この狂言、ここであつたのは、腑に落ちた。

しかし年がかわり、あるニュースを聞いてこの狂言を思い出した。オリンピックを指すカヌー選手が後輩の有望選手に違法薬物を飲ませ、オリンピック出場レースから排除しようとした事件である。この選手は日頃から後輩に慕われ、その相談相手にもなつていたほど親密だつたという。このニュースから、座頭がなぜ酷い仕打ちを受けたのか、その理由が分かつたような気がしたのだ。解説本には、男の心変わりには、ふとした悪戯心だと理由を明かしていないが、男は、明確な動機を持ち、相手の目が見えないことを利用し座頭

を痛めつけた。動機は、ズバリ、レースでの敗者が勝者に抱く嫉妬心、あるいは復讐心ではないのか。二人が出会い、風流を愛で、唄を披露し、謡いを舞い、酒をくみかわすとは、己の教養と芸の技を競い合うレース||競技ではなかつたか。上京から来た男、下京に住む座頭が出会うという対決構造。月を詠み舞う男、あくまでも虫の音を詠み舞う座頭、交歓の内容は決して交わらない。共演ではなく競演なのだ。男は、技を競うレースで、教養の深さ、謡や舞の技の優劣、相対してわかる人間の能力、その大きさや豊かさのどこかに、負けたと感じる何かを見たのではないか。俺は、盲人の相手に負けた。人の世、今でも日常の付き合いで、相手の能力、技に嫉妬し、憎しみさえ覚えるようなことはないだろうか、特に若い時分にはあつたらう。そうであればこそ、作者は台本にその「たくらみ」を忍びせているはずだが、彼らが競い合うように古歌を引用し、謡い舞うが、その優劣について、古典教養に疎い私に読み解くすべはない。従つて、以上は、状況証拠による推論でしかないのだが、そう思えるのだ。では一方、座頭は、本当に自分を襲つた男を別人だと思つたのかどうか。目が不自由な人には、優れた五感があるという。従前まで謡い合い酒を飲み交わした相手を、声が変わつただけで別人だと思つてほうが不自然ではないのか。男が同一人と分かつていながら、あえて別人としたのは、保護される盲目者としての立場をわきまえた大人の振る舞いなのかもしれない。この演目が「くっさめ留め」という形で終わったのは、世の寒さをあらわすだけでなく、今でも大きくくしやみの後に、蒼生！と叫ぶ人が

いるように、悪霊払いの意味もあり、こんな出来事は、これで終わりにしようとする座頭の大人としての割り切りかもしれない。そういえば、座頭の退場する後姿が、悄然と、いより毅然として感じられたのは、男は同一人と分かつていたという演者の解釈による計算によるものなのか、それは、演者のみ知ることである。ちなみに、座頭を演じた畏敬する大先輩とは、放送人の会員、元NHK放送総局長の遠藤利男さんである。

結局、この狂言における推理は全く的外れかもしれないし、推理自体意味がないかもしれないが、今回私が浅薄な知識をもとに、ああだこうだと面白がつて楽しんで感じたのは、大きなテーマとシンプルな構成だけをポイントと放り投げ、観客に自由に考えさせる狂言の奥深さである。同時に感じたのは、あらためて、今のテレビドラマは語りすぎではないのかということでもあつた。説明過剰が視聴者の思考を停止させている、今のテレビ界の習性なのか、予告宣伝で舞台裏までさらし、至れり尽くせり、全てを説明してしまう今のテレビドラマで、今回の狂言のように、その読後感を丸一日も楽しめるようなものは、今滅多にないのだ。



放送人グランプリ下馬評座談会

―恒例のグランプリ下馬評座談会をお届けします。同封した放送人グランプリのノミネート用紙に書くための参考になさってください。初出をゴシックで示した番組名や人名はノミネート対象ですが、対象はこれに限るものではありませんし、対象期間の3月末までこれから放送される番組やその関係者については語られていません。いつものようにA、B、C、D、とあるのは段落記号のようなもので特定の発言者を示すものではありません。

【総論風に】

A 昨年の8月、終戦特集でいくつかのドキュメンタリーがあったが、それが現在の社会とどうつながっているか。トランプ大統領のいくつかの失言、暴言が世界の政治経済ばかりでなくいろんなところにつながっているが、日本にはどう影響しているのか。安倍一強時代が続いていて、政治目的は政権を長く維持することだけになって、これからどうなるのか。それから北朝鮮。これは日本の軍備強化につながっている。この1年はいろいろあった。

B 少子化高齢化で、生産者人口が減り、活性化のためにどうするか。定年は70歳に引き上げられるのか。団塊ジュニアの世代が75歳を迎えるときどんな社会になるのだろう。そうしたもうもの問題にテレビはどう取り組んだかをみたい。

C 昨年、吉永春子さんの追悼番組として「魔の731部隊」を再放送していた。あそこでは細菌兵器も作っていたんだ。それから、星野仙一が死んでいろんな特集が放送され、ファミリーヒストリーが放送された。お父さんは三菱に勤めていて戦後すぐ死に、母親は女

手一つで戦後の時代に星野仙一を育てた。つまり、どんなタイミングでどんな番組を放送すればいいかを決めるすぐれた編成マンがあれば表彰の対象にしてはどうなのだろうか。

A 編成ということでは、「やすらぎの郷」は昼の帯ドラマという意欲的な編成だった。その後も長期の帯ドラマを続けている。「やすらぎの郷」は今年度の話題作だ。

B あのドラマ枠を作ったのは五十嵐文郎だ、中込卓也だとか、言われているが、そのあと帯ドラマを続けるなど編成的な手腕を発揮したのは五十嵐さんじゃないか？

C GOを出したのは早河洋・会長さん。鶴の一声で、「お名列車」という声が局内にはあった。

D 早河さんは「ニュース・ステーション」を平日のプライム枠に作った。大胆でドラステイックな編成改革を勇気をもってやれる人だ。

倉本聰の「やすらぎの郷」の構想は各局で断られたので、石原プロの小林専務（故人）が早河さんのところへ持って行った。倉本、小林、早河という実に妙なグループがあつて、「助けよう」ということになったが、スポンサーがらみで倉本構想の8時台はかなわず、

唯一見つけたのが12時半からの枠だ。

A 倉本聰は怒って「それじゃオレやらない」とひと悶着あつたが、あそこでやることになった。優れた編成マンを表彰してはどうか、との提案があつたが、誰が決定権を持つていいのかの判断は難しい。アメリカには視聴率ビリだったNBCを1年でトップに押し上げた大胆な編成局長がいたが、日本には現場あがりトップが少ない。

B 早河会長は報道出身だが学生時代は放送研究部で、ドラマへの関心は高い。テレ朝はスタジオドラマを一時やっていたが、復活させた。テレ朝のドラマは今元気が、それは早河氏の功績と言つてもいい。

C テレ朝は朝に時代劇、午後に「相棒」科捜研の女、「ドクターX」などドラマの再放送を並べているが、ドラマでもりあげていこうという局の方針があるの？

D テレ朝のDNAには「他局のやってないものをやろう」というのがあり、生を大事にしてきたが、生でないところはドラマのリピートで埋めている。東映と組んでいるので東映のドラマのリピートは多い。

A 早河さんの決断は評価するが不健全さも感じる。昨年の放送文化基金賞で「古舘伊知郎のトーキングヒストリー」が授賞した。「忠臣蔵」を実況中継するという面白い試みが評価されたのだが、その授賞式で担当Pは「これは早河会長の発案です。会長ありがとう」と挨拶した。あんな場で言うべきことではない。社長、会長がゼネラルプロデューサーであつてもいいが、トップダウンのやり方は現場で最も反発を買いやり方だ。

B テレ朝の昼のドラマ劇場は今の「越路吹雪物語」でいったんおわり、この4月から1年間休む。そのあとはテレ朝60周年記念として「やすらぎの郷」第2弾をやる。これは記者会見で早河会長が発表した。

C NHKの朝ドラは一時期低迷していたが、「8時のニュース」「朝ドラ」「朝いち」の編成に変えて低迷を脱した。あれは現場に近い編成担当の発案だろう。

D かつて、テレ朝の伊藤邦夫社長は「ドラマはお金がかかるからNHKにお任せして、われわれは報道に力をいれます」と言った。久米宏の「ニュースステーション」がヒットしていたころだ。その頃からみると今のテレ朝のドラマは力をつけ、よく当たっている。

A NHKの8時台の問題は報道と番組制作とが時間をかけて協議して解決したし、大河ドラマの企画は部長か、せいぜい局長のOKがあればよかった。それがいつのころからか、会長のOKが必要になり、「紅白」の出演レントも会長に直訴してから交渉にはいるようになった。放送現場ではあつてはならないことだと思つた。

B 長く放送局をみているものごとの決定権はほとんど上へ行っている。最近では「紅白」の司会者についてA案、B案の二つを持つて会長に決めてもらった。

C NHKの編成の中でドラマは決して中心ではない。いろんなジャンルの中の一つだ。予算的には大きいけど、編成の扱いは大きくはない。ドラマ制作の現場としては民放を羨ましいと思つことがある。

D テレビ局では制作現場に関係ない人が偉くなる。「おれ、テレビなんか知らない」と言つて新聞社から来た社長とか、ビジネスのこ

としか考えない人たちだ。早河さんは現場で番組を作っていた人だから、番組をみて、愛する。番組を愛することを知らない社長は多い。

A 権力を握って「俺が決める」という人が偉くなる。それがずれて、変な判断になっていくのだろう。

B 民放地方局の社長はほとんど新聞出身で現場出身は少ない。

C この1年は天皇の退位が決まり平成の終わりが見えた年だ。選挙ではあれだけ批判されながら安倍一強は更に力を強める結果になった。この状況がテレビにも影響して、現場の無力感が生まれているようだ。みんな上を向いて現場の主体性が薄れている。

D この1年放送と通信の垣根はますます低くなった。一昨年の芥川賞「火花」がネットフリックスで世界に向けて発信された。これをNHKが昨年明けに全10回を総合テレビで放送した。このことがギャラクシー賞の「フロンティア賞」を受賞した。個別のメディアでなくてメディアミックスの取り組みを表彰しようと出来た賞だが、この2回目の受賞だ。ネットで先やって後で地上波でやるクロスメディア展開にNHKもWOWOWも積極的だ。昨年はHULUとNTVとWOWOWの共同制作で「ルパン3世」に登場する銭形警部が主人公の作品を作り、それぞれが配信し、地上波でもやるという展開だった。WOWOWは東海テレビとのメディアミックスもやっている。

A 民放でやっていた唯一の昼ドラが東海テレビの昼ドラだった。これを「昨年の3月にやめて、代わりに「やすらぎの郷」を放送す

る。そして夜11時台に連続ドラマの枠を作り昨年は「犯罪症候群」をWOWOWと共同制作し、最初の8回は東海テレビ、フジテレビ系列で流し、続編をWOWOWで放送する。TBSは同じようにWOWOWと組んで「もず」を作った。

B 時代劇はいま激変中だが、日本映画放送がやっている時代劇専門チャンネルは何年か前からフジ系のスカパーとBSフジと組んで新しい時代劇を作っている。昨年は日本映画放送の杉田成道自らが監督した藤沢周平シリーズの第1作として作った。地上波、ペイテレビ、動画配信サービス、これらがまとまってコンテンツを作る流れになっている。

C ドキュメンタリーも同様で、ATPでは配信系も賞の対象にした。

D 映画界では「ああ荒野」。寺山修司原作でテレビマンユニオンの岸善幸が監督のボクシング映画。これのやり方も新しい。これまで映画は最初は映画館、ついでDVD、ペイテレビ、最後に地上波という形だったが、「ああ荒野」は映画館での公開は2週間ぐらいで限られていて同時にDVDを売った。ついで日本映画放送で5回の連続ドラマとして流した。映画ビジネスの常識をぶっ壊すやり方だが、制作費(15億円)を回収するため新しい方式を考え出したわけだ。この映画が報知映画賞日刊スポーツ映画賞、キネ旬で3位と賞レースのトップを走っている。これも放送分野の作品として評価するのだろうか。

A それは別として、テレビは昔回顧のものが多い。「やすらぎの郷」がそうだが、そのあとの「トットちゃんねる」「越路吹雪」、「植木等とのぼせもん」もそうだ。単発でも「破獄」

が作られたり、何か目新しいものが少ない気がする。

B 話を蒸し返すが、編成を評価する賞は考えないの？

C 編成ということではなく、枠、例えば「帯ドラマ劇場」を評価するのはどうか。

D 編成を評価するのは難しい。編成に対しては、何故ドキュメンタリーを深夜に放送するのかと不満だ。そちらの方が問題だろう。

A 例年のことではあるが夏のNHKの終戦特集は今年度特に力が入っていた。もちろん個々の番組制作者の力があつてのことだが、やはり編成の力があつたのだと思う。

B あの中の「戦慄の記録インパール」は完全版にしてBS、プレミアムなどNHKのすべてのチャンネルを使って放送された。これは極めて異例のことだという印象だ。

C 若い戦争を知らない世代から「知らなかった。びっくりした」という凄いい反響があつたそう。

D ずるずると番組の話になっているので、ドラマの話にしよう。

A 「やすらぎの郷」に高齢者は同世代として否応なく引き込まれてしまう。鼻柱の強い倉本イヅムは後半になるほど強く出てくる。3次元でなく、4次元、5次元の多彩さをもっている。最初はルイ・ジューヴェの映画「旅路の果て」みたいなドラマが始まったと思つて、すぐみるのをやめたのだが、しばらくしてみなおして非常に同感した。若い人はどうなのだろうか？

B その対極にあるのがNHKの「精霊の守り人」。あまり評判にはならなかったが、頑張



つて最終章までやり遂げた。

C 番組PRが凄じ量だった。

D 「やすらぎの郷」と並行して、同じ世代を描いたドラマにNHKの朝ドラ「ひよっこ」がある。朝ドラの王道のような作りみえるが以外に新しいことをやっている。脚本の岡田恵和さんは3作目だが、その思い入れをスタッフがきちんと受け止めた。「やすらぎの郷」となっていて昼の不思議なドラマの時間帯ができて面白かった。

A 「ひよっこ」をみて思い出すが、出稼ぎを追うドキュメンタリーが作られた時期がある。NHKの「ドキュメンタリー」で放送された「村の女は眠れない」という秀作があるが、半年、ときによっては1年出稼ぎから帰ってこない状況をシンプルに描いていた。あの時代の雰囲気「ひよっこ」はよくとらえていて、下宿にいる漫画家志望の若者や若い女性など、キャストینگもよく、朝ドラとして面白くみた。

B WOWOWの「沈黙法廷〜石づつ〜」（日曜・22時）がいい。外務省機密費を暴いた捜査2課の物語で、よくできていた。

TBSの「陸王」（日曜・21時）はテレビドラマはかくあるべきだという根源的なものを全部出している快さがある。役所広司、阿川佐和子などキャストینگは派手だとは言えないが、わかりやすく、下から視線に徹底して面白かった。

C 担当は福沢克雄。「半沢直樹」「下町ロケット」「ルーズベルトゲーム」そして「陸王」と池井戸潤原作を手掛けてきた。大型のドラマを作る力量は大したものだ。

D 役所広司をはじめ男が泣きすぎる。観客

より先に役者が泣いちゃいけないとドラマ作りの先輩から教わったが、あの「泣き」も客をつかまえる戦略なのだろうか。

A 泣かせるわざが優れているのだ。「ひよっこ」もそうだ。東京オリンピック、集団就職の夜行列車、高度成長、出稼ぎ労働者、などを継承しなくてはという思いが伝わってきたが、下から視線で、大衆の心をつかんだ。

B 逆に「やすらぎの郷」は芸能界のスキヤンダルなど覗き見の関心に添えて「みせてあげる」という直截な姿勢、「精霊の守り人」は特殊撮影など「見せたいものを見せる」という姿勢を感じる。この2作が今年のエランドール賞の特別賞に選ばれている。

C 倉本さんの設定によるとテレビ局にいた人間は「やすらぎの郷」に入れない。何故ならテレビをダメにした人間だから、という。テレビ局にいた人間として腹が立った。

D 30年前の「6羽のかもめ」では、「テレビを金儲けの道具としか考えなかった人間に、テレビを懐かしむ資格はない」と言ったが「懐かしむ資格があるのは一緒に闘った仲間であり、テレビを愛してくれた視聴者だ」と叫んだ。「やすらぎの郷」は違う。一緒に闘った仲間も否定している。テレビ朝のスタッフはそんな倉本さんに何にも言えないのか。

A 数年前、WOWOWの岡野真紀子はボツになつていた「字」という脚本を引つ張り出してきて、「倉本さんこれは古いですよ」と面と向かって言っていて喧嘩しながらドラマに作り上げた。それがものを作る人間の健全な関係だろう。

B 「西郷（せいごう）」（NHK・大河ドラマ）がいい。深淵としている。主役が地味だけど

重庄感がある。

C あの時代を大河でやるのは大変だ。フィクションにできない部分が多すぎる。三谷幸喜脚本の「真田丸」なんか自由奔放で面白かったが、あんな真合にはいかない。

D 今年のNHK正月時代劇「風雲児たち〜蘭学革命編〜」が三谷幸喜脚本で、「真田丸」の出演者たちが多数出ている。杉田玄白の解体新書の話だ。デテールは細かく描いてあるがドラマがない。

A 単発ドラマでは「眩くらら〜北斎の娘〜」（NHK・10月7日）がいい。単発ドラマ衰退の風潮の中で気を吐いた。演出は加藤拓。主演は宮崎あおい。4Kのショーウインドー作品で、セット、照明にこつている。

B 大河ドラマは政治ドラマだが、浮世絵師が主人公のような文化系大河ドラマがあってもいいと思つた。

C 単発ドラマは、メディアのクロスオーバーの時代にうまくのつてもいいのじゃないかと思う。何らかの形で評価したい。

D かつての秋のNHKドラマスペシャル、5週連続90分シリーズを知っているが、若手ベテランがそれぞれ脚本家と組んで一から作って行き、見ごたえがあつたし、あそこから演出家、脚本家も育つていった。あれはもうできないのだろうか。

A 1回読み切りの時代劇ならBSジャパンが火曜ドラマで「山本周五郎時代劇」をやっている。民放連賞を受賞しているが、ごく短い短編の感じで、作りが小さい。

B NHKは一時期大艦巨砲主義で大赤字を出し続け、ある時期それをやめてドラマスペシャルはなくなつた。

C 民放各社の2時間ドラマ枠はミステリーのシリーズなど定番化して特筆すべきものがないが、テレ東のドラマスペシャルは頑張っている。



D かつてTBSの東芝日曜劇場には北海道名古屋、大阪、福岡の系列各局から優れた作品が寄せられた。いずれも単発で、大長編に對する短編の良さがあつた。

A HBCにはそこで放送された200本の作品が倉庫に眠っていたが、そのうちの20本がネット配信されている。「りんりん」と「時計「ばんえい」「幻の町」「うちのホンカン」などだ。倉本聰の脚本、守分寿男演出をはじめとする作品群で、今なお新鮮さを失っていない。

B 「孤獨のグルメ」はテレ東が数年前からドラマスペシャルとして何回か放送してきたもので、今年度は12月31日に瀬戸内出張編を放送した。テレ東の社是は「金がなければ知恵を出せ」だそう、それが編成方針に見事に反映している。「Youは何しに日本へ」家についているか」などがそうだ。

C 「ドラマ25」という枠がある。金曜の深夜、24時〜25時の放送。劇場系の劇作家を12人集めて全員に書かせている。これは物凄く手間がかかる。それを各プロダクションに割り振る作業をテレ東がやっている。ドラマの質も高い。

D あれは他流試合みたいなもので、各プロダクションは自由にやっている。

A WOWOWの「沈黙法廷」石つぶて」の原作は清武英利。巨人軍球団代表として渡辺恒雄と争った「清武の乱」の本人なので原作も丹念に読んだ。このところ民放のドラマは警察ものと医療ものが全盛で「石つぶて」も警察ものだ。そもそもドラマの1時間の中で、刑事が2、3人で動いて解決する事件なんてありえないのだが、このドラマは丹念に

描いている。捜査2課の刑事が佐藤浩市と江口洋介、外務省のノンキャリアの役人が北村一輝、好演だ。外務省機密事件は結局よくわからない。還流したかどうかもわからない。国家の闇なのだ。その間に「筋の光をあてた。原作の清武はここまでできるかと思うほど密室の再現をしている。これを忠実にドラマ化している。

B こまかいディテールがすべて事実に基づいている。愛人の家の洗濯物にパンツが出てくるあれは事実だ。

C 社会派の骨太の作品はかつてNHKがやっていたのではない。NHKの土曜ドラマでやっていたような作品がいまWOWOWに来ている。

D 和崎さんがWOWOWに行つてNHKでいいと思つていたものもやっているんだね。和崎さんが言うことはシンプルだ。「上質な何をやってもいい」だ。

A 最近のテレビはバラエティやドキュメンタリーがドラマ化している。いい意味でドラマの領域を侵食している。日テレのバラエティが強いのは根っこにドラマのやり口があるからだ。NHKのファミリーヒストリーもドラマだ。ドラマ以外がドラマ化してドラマ制作者はやりづらい。

B ドラマにもお笑いやバラエティなどのいるん要素が入ってきている。「おんな城主直虎」がそうで、時代劇の約束をはずして面白くやっていた。

C お笑い芸人がドラマにどんどん起用され、しかもうまい。

D 連ドラでは「**君の声**」(NHK・金曜22時)もあげておきたい。個の回復と連

帯をテーマに、しみじみとしたドラマで、朗読の場面は誰もが快く感じたとと思う。

A あれと「眩(くらら)」の脚本が大森美香だ。ともにオリジナナル。

B 「監獄のお姫さま」(TBS火曜・22時)が面白かった。宮藤官九郎の脚本、小泉今日子、満島ひかり、菅野美穂の出演でよくできた連ドラらしいドラマだ。

C 昨年早坂暁さんが亡くなって、その追悼という意味で「花へんろ番外編」が作られる。脚本は早坂暁に私淑していた富川元文。演出は前に「花へんろ」を一緒にやった平山武之。今年度内にBで放送される。

D 早坂さんが昨年12月16日に亡くなっていつ追悼の番組をやるかとみていたら、年明けから「夢千代日記」を再放送した。もつとやつていいのではないか。

A 昭和の黄金時代の脚本家がほとんどいなくなった。

【ドキュメンタリー】

B 今年もNHKスペシャルとEテレ特集には一貫した流れがあつた。4月30日、Nスペ「憲法70年 平和国家はこうして生まれた」、7月10日、Nスペ「スクープドキュメン ト沖繩と核」、8月5日、Eテレ特集「告白」満蒙開拓団の女たち」、8月13日BS1スペシャル「なぜ日本は焼き尽くされたのか」米空軍幹部が語つた「真実」、8月15日、Nスペ「戦慄の記録インパール」がそうで平和問題を一貫してやっている。

C 昨年NHKは「文民警官」が目立つくらいで、榎井会長が変わつた途端ういぶん増えた。特に8月の4本は優れていた。

D 会長交代の影響があつたかどうかかわから



ない。時間をかけて取材したものがたまたま溜まっていたのかもしれない。

A これらはアメリカ、ロシア、当時のソ連そしてイギリスなど外国からの資料発掘に負

つている。特に8月の4本の作品のベースになっている。日本では資料は抹殺され、残っていない。

B それは以前から言われたことで、日本の貴重な資料は原爆関係なども含め戦後のいち早くアメリカが持ち去った。731部隊の資料もそうだ。

C インパールの資料はイギリスにあった。樺太の記録、ハバロフスク裁判の記録はロシアだ。

D 日本の戦争の指導者たちの無為、無策、無能、無責任の体制をあれだけきちんと描いたことはなかっただろう。

A 「インパール」がまさにそうだった。

B 戦後間もなく活字ではインパールものはたくさん出た。上司を告発するものもあったが、こんなに長時間の映像はない。しかもまだ生きて証言する人がいる。現地の人で90何歳であるときの日本兵を見た人がいたのにはびっくりした。番組の最後のあの証言でびつと決まった。

C 戦時中の日本兵士の行動に一番影響したのは軍人訓より教育勅語だったそうだ。森友学園が幼稚園児に教えているが、当時の兵士たちは子どものころから教えられ信じている。

D 満蒙開拓団の自殺、沖縄での住民の自殺にも同じ思想がある。

A 私の村から満蒙開拓に行った人たちはダイナマイトで自殺した。50人ほどが死に胸に抱えられていた赤ちゃんが一助かつて現地の中国人が育て、数年前日本に帰ってきた。

B インパールで思うが、ロジスティック、兵站は重要なのだ。今でも大災害時の取材ではディレクターやカメラマンより、食料を調

達する係のことをまず考える。戦後アメリカの放出物資の中に軍用の食料があったが、蠟で密封されていたりでアメリカのロジスティックは優れていると思った。長期戦に備える戦略があったのだ。

C 日本の戦国時代をみると信長が死んで秀吉が毛利征伐で中国地方から大返しで戻るときも食料、後方支援の体制はちゃんと作ってやっている。兵站の重要性は軍人の常識のはずなのに何故日本軍は現地調達にしまつたのか。大本営がいくら考えても運ぶ船も車も食料もない。破れかぶれて現地調達だ。

D インパールは半数以上が餓死だ。

A 「輜重輸卒が兵隊ならば蝶々トンプも鳥のうち」と輜重兵、つまり兵站をバカにした。

B 丸山真男が「無責任の体系」と軍隊の構造を書いているが、東芝など企業の不祥事を見るとそれが克服されたと思えない。

C 番組制作者はいまがそんな曲がり角だと意識している。

D 昔を語ることで現在を撃つ間接話法でなく、直接話法で語れという意見がないわけではない。数年前のNSPで海軍の幹部たちが語った「400時間の証言」のタイトルは「やましき沈黙」で、あれは「あなたたちは大丈夫か？沈黙を克服しているか」と語りかけていた。その伝統だろう。

A いまテレビは「わかりやすく」が主流で間接話法でわかって欲しいと思つたら、編集しなおしてBで再放送するなど、別のことを考える。8月の4本をまとめてスタジオで語らせるなど考えるべきかもしれない。

B 現在を語るにはドキュメンタリーだけでなく、ワイドショーやサンデーモーニング」

のようなスタジオ番組が適切なこともある。テレビは映像だけでなく喋りも重要だ。

C この1年、トランプ大統領が目立つが、マジリティーが差別も含め気ままに、自由に発言している。一方、為政者は選挙を意識して人気取りの発言をする。日本では官僚の人事を内閣府が一手に握り、官僚は小さな発言を忖度して長期的な計画を考えるエリートが育たない。国家財政は借金に借金を重ねいずれデフォルトになると言われる。それに責任をとらうとしない政治家たちをみると、マスコミとしてどうすればいいのかと考える。

D 政治をイデオロギーや正義で語るのはいやだ。政治は利害の調整をするものだろう。政治に美字を持ち込んで「美しい日本」などと言うのは困る。彼が考える美しさと私が考える美しさは違うのだ。

A NNDドキュメント「放射能とトモダチ作戦」を推したい。昨年表彰された加藤修一の制作。きわめてショッキングな事件で、福島原発の放射能を帯びた煙が海に流れたとき、アメリカ空母レーガンが何にも知らずにそこを通過して乗組員が被曝、そのうちの9人が死んだ。

B NNNの原発問題に取り組む姿勢に感心するが、この番組には一時期当会の会員だった倉沢治雄氏がかんでいる。原発関係の彼の調査データは詳細でしつかりした番組になった。

C 現在の北朝鮮は戦争中の日本の国家体制に酷似している。金正恩が天皇と同様、軍を統帥し、言論を封殺し、物価を統制し、国民は国家への奉仕と忠誠を強いられる。この酷



似ぶりに触れるドキュメンタリーはないものか。

D その北朝鮮が核兵器を持ったというので日本は圧力をかけるよう世界に呼び掛けているのだが、核廃絶協定には署名しない。世界で唯一の被爆国としての立場にたつた外交政策を求める番組は作れないのかと思う。

A ICANのサーロー節子さんをずっと追いかけていたのがNHKだ。

B 個人では山口放送の佐々木聰（あきら）をあげたい。今年の民放連賞は山口放送、毎日放送、読売テレビが授賞したが、そのすべてに佐々木聰が関わっている。あるときはディレクター、ある時はプロデューサー、文部省唱歌、童謡をテーマにしたラジオ番組では構成を担当している。

C 「奥底の悲しみ」の制作者で民放連賞放送文化大賞グランプリなど数多い授賞があ

る。放送人グランプリの対象としては新鮮味がない。

D しかし彼はいろんな形で後輩を育てている。しかもそれはローカルのニュースを5年10年撮りためて作って行く。戦争については彼は40歳まで取材したことがない。彼のそのスタンスは村上雅通氏が水俣出身であるが故にいつさい触らなかつたが、あるとき触り初めて徹底的にこだわったのと共通する。

佐々木聰は3作目をやっているが、かれはナイーブでシャイな男でハードな素材は嫌い。これまで評価されたのは「ふたりの桃源郷」に代表されるヒューマンドキュメンタリーだ。今新しい素材に全力で向かっている。

A おじいさんの後を継いで米を作る女の子の話、対馬の近くの日韓交流の基地の島など、地域に密着したいいい作品をたくさん作ってきた。

B 若い人をあげよう。地方の時代映像祭で「かあちゃんのはん」で受賞した信越放送の中村育子さん。熊本放送の村上雅通さんの愛弟子の井上佳子さん。

C NHKの北海道では「北海道の鉄道がダメになる」との番組を出しており、最近の天候異変については、昨年ポテトチップスがなくなった話を札幌テレビがやった。テレビ信州は「プラス4度Cの世界」で今世紀末に予想される温暖化で標高の高い信州がどんな影響を受けるか描いた。

D 賞をいっぱい貰っているので言うのをためらうがメーテレドキュメント「防衛フェリィー民間船と戦争」(5月29日)をあげておきたい。ディレクターは依田恵美子。民間フェリーが軍を運ぶために使われる。北海道か

ら沖繩へ戦車などを運ぶ。これまでロシアを仮想敵国にして北海道に集中配備していた軍備を防衛戦略が変わって沖繩へ移動する。しかし自衛隊にはフェリーがないので民間フェリーを借り上げて大量に運ぶ。フェリーの船腹には子どもが好きなキャラクターが描かれていて映像をみると思わず笑っちゃう。

A 最近のテレメンタリー「追跡」の中に一部入っていた。

B 椿プロの代表・金本麻理子さんをあげたい。何年前か前「マニラ市街戦」のディレクターとして表彰されたことがあるが、現在NHKと組んで正確で鋭い海外取材を続けている。今期はBS1スペシャル「偽りの結婚」を追いつめられるシリア難民女性」(6月11日)を作った。シリア難民の女性が結婚すれば国へ帰れる、身分保障されると偽装結婚をさせられ、実は国へ帰れない、現地の生活にも困るといふ悲惨な状況を描いている。「父をさがして」日系オランダ人の終わらない戦争」(10月8日)も彼女の作品。それまでオランダ領でオランダ人が数万人住んでいたジャワ島に日本軍が駐留して軍政を敷き、日本軍人とオランダ女性との間に5千から2万5千の日系オランダ人が生まれた。その人たちがオランダに帰国して悲惨な生活を送った。その人たちの唯一の希望は日本の父親を探すことだ。ベトナムの、フィリピンの孤児の父親など日本人の父親探しが行われているがその代表だ。

C NHKの伊藤純は日本の民族的な伝統文化的な番組にこだわっていたが、最近ではあらゆる番組にかかわっている。「自分が手掛ける番組は当然ながら台本に全部目を通します」と言

っていたが、番組表のプロデューサーの欄にはよくこれほど思うくらいの数で、彼の名前が並んでいる。最近「新日本風土記」が再放送されているが、新しいものがとてもよく出来ている。

D 彼はいまBSプレミアムで「平成細雪」をやっている。市川崑の映画「細雪」を時代を変えてのリメイクドラマ。脚本が蓬萊竜太で面白い。

A もともとドキュメンタリーをやっていて兵隊が同僚の肉を食って生き延びたという「兵士の証言」を作った。

いろんな授賞式に行くと思わず壇上にいる心とだが現役で、NHKは役員待遇のCDで終わっていまエンタープライズだ。

B 塩田純も頑張っている。2年前の「関東大震災と朝鮮人」悲劇は何故起こったか、今期は戦争特番「原爆と沈黙」長崎浦上の受難」(NSへ、8月12日)だ。

C 「バリバラ」の日比野和雄はどうだろう。「バリバラ」は「同情するなら笑ってくれ」がキャッチフレーズで、日本人の障害者観を変えつつある。「あなたの夢叶えます」と障害者を山登りに連れて行って放り出して、助けしてもらってやつと登った彼らが大展望を見て「やっぱりうちでテレビを見ている方がいい」とホンネを言わせている。性欲、恋愛などの障害者の問題をタブーなしで徹底的にやっていると、これはやはり特筆すべきことだろう。

D 「バリバラ」や「ハートネットTV」のような定時番組があることは重要で、相模原障害者施設殺傷事件のときは半年くらいずっと追いかけていた。熊本地震のときも報道局と別にこのスタッフが同時に飛び出して、ハ

ンデをもった人が避難所でどんな暮らしをしているかを取材してすぐ帰ってきて生番組でやっている。

A その前に「きらっと生きる」という典型的な福祉番組をどう変えるかと彼が考えて作った。

【バラエティ】
B バラエティーでは何といつても「池の水を全部抜く」(テレ東・2カ月に1回放送だ。テレ東の番組はお金がないから知恵を出すだけでなく、汗もかいている。膨大な数の取材陣を出しボツになっている。中継スタッフも出演者も汗をかき、地域の人たちもみな楽しそう。子どもたちはめつたにできない泥んこ遊びを楽しんでいる。外来危険生物の駆除という共通の目的があり、参加者はおおいに勉強している。

C NHKでは氷河の下の生物や南極の氷の下の深海の生物を探るなど人間の目で見ることのできないものをカメラで見せ、これはテレビの使命といつていいことだが、池の水を抜くと何が出てくるか実はわからない。身近な秘境なのだ。池の水を抜いてみると外来危険生物だけでなく、自転車、パソコン、大人のおもちゃまで出てくる。何が出てくるか面白くて、秀逸な番組だ。

D 「家について行く」イイですか(水曜・21時)はお金がなくてスタジオを使わないので一般人の住居、居間をセット代わりにしている。居間そのものがそこに住む人の人生を語り、酔っぱらってホンネを語り、2、3時間の取材の中でその人の人生が丸見えになる。インタビュアーがうまい。

A NHKの「ドキュメント72時間」はこれ

に学んだものだろう。

B 「家 ついて行って…」はドキュメンタリーであり、現場中継の面白さだ。

C 3年ほど前井の頭公園の池がかいぼり（水抜き、天目干し）をやって、自転車の山やいろんなものが出てきた。テレ東の「池の水…」はあれをみての発想だと思うが、いろんな地域から「うちの池をやってくれ」とオファーが殺到し、各局は同じ企画を考えている。

D テレ東の「日曜ビッグ」はいろんなことをやっているが問題解決型バラエティーと呼びたい名作がある。新宿ゴールデン街などスプレーで落書きされた街をきれいにする、汚れを落とす番組がある。いろんな汚れがあつて、汚れを落とすいろんなプロがいて落としてしまう。これは類似番組がなく多分オリジナルだ。

A 「テレビ鑑賞団」はもう45年やっている長寿番組だがお宝を持って登場する人たちのヒューマンドキュメンタリーともいえる。

B あれの原型はイギリスBBCにあつて、かつての中川順会長が「俺が作った番組だ」と自慢していた。これまでどこからも表彰されていなかったから、放送人で評価してもいいかもしれない。

C 猫が好きで「世界猫歩き（BSプレミアム・金曜・10時）を見ている。カメラマン岩合光昭さんの撮った猫は実に美しい。

D 「ぶらタモリ」が最近素晴らしい。事前の調査が行き届いていればこんなに面白い番組になるのかと驚く。前は当たり外れがあつたが、このところ何をやっても面白い。この前は田園調布だった。

A 地学学会から表彰されたタモリの地形学の蘊蓄はたいしたものだ。相方は訳知りより天然系の女子アナがいいようだ。今の近江友里恵アナは実は非常に賢いのだがボケに徹している。

C 地形的な成り立ちがわかっていると街を見る目が違ってくる。大した番組になつてきたと思う。

D おかげで江戸の古地図が売れているようだ。田園調布は文人が「地盤が固い」と住むようになって高級住宅地になつた。小林一三が開発したんだね。

A しかし後ろにカメラマンをはじめとする大群が写るのは気に入らない。お金と人手をかけてるぞとみせたいのかね。

B 「初めてのお使い」も最近は隠し撮りのはずのカメラマンがやたらに画面に出る。

C NTVの高視聴率はバラエティが支えているが具体的には？

D 「地球の果てまでいってQ」「笑点」行列のできる法律相談所 など。視聴率上位にずらりと並んでいる。

A 「日本人のおなまえっ！」が面白い。最初3回くらいの番組かと思つたが延々続く。前回は外国へ行って「おしん」という名前が多い、とやっていた。

B 「おしん」の名の店とか、「おしん」の名の娘を集めて座談会させるとか、面白くやっている。

C ラジオの聴取率は相変わらずTBSが好調で68期トップを続けているが2位以下との差がちょっとつまつてきた。

話題としては、TBSがAIとの共存ラジオ

というのをナイターオフの夕方6時頃から4時間やっている。「どんな声でも演じられるFROGMANとAIペットとのコラボ」という売りだ。なお、TBSラジオは来年ナイター中継をやらないと宣言した。

D パーソナリティーでは小林克也さんあげたい。DJの莫分けて現在77歳だが、めちゃくちゃ元気でNACK5の「ファンキーフライデー」で9時間生放送を続け、ニッポン放送で「ミュージックマシニング」やっている。もう40年ラジオで喋り続けているのだが、賞には全く縁がなかった。空気がたいて思われてきたのかもしれないが、ラジオにとつて大事な人だと思う。

A テレビでも夜中にBSでやっている。

B 火曜サスペンスで俳優をやったこともある。

C 番組ではSBSラジオの「幸せのカタチ」本日の親子 本物の親子」（5月28日）がある。里親制度を取り上げたもので、静岡は日本一里親に優しい県だ。SBSのアナウンサー原田亜弥子さんの企画で、是枝さんが映画でやったことをラジオで実話としてやっている。少子化の中での家族愛、親子愛を考えさせられる作品だった。

D CBCラジオ「6分の1の群像」もあげよう。子どもの貧困に焦点をあて、無料で学習支援する名古屋市の学習塾を描いた。一億みな中流の社会から本当に貧しい子どもがいる社会に変わったのだと考えさせられた。

A RKBラジオの「SCRAATCH線を引く人」（12月29日）を聞いて欲しい。重度の自閉症と知的障害を持つRKBの神戸金史記者が相模原障害者施設殺傷事件についてフェ

ースブックに書いた「何故人は線を引くのか」との問いかけが反響を呼び、神戸記者は植松聖に手紙を書く。手紙で「もしあなたに障害者の子どもがあつたら殺すか？」と問うと、あなただっていなくなつて欲しいでしょう」という返事が戻つてきたので、TBSラジオの人と二人で会いに行き映像も音声もとらず、二人でその模様を再現して1人称の語りで1時間の番組を作った。

B 一昨日の放送でNHK横浜放送局の女性記者の「あなたは自分の子どもが障害者だったら殺すか？」の問いかけに植松は「うん」と黙って答えなかった。あれは「ハートネット」で放送されるのだろう。



座談会次第

日時・1月26日（金）午後2時～5時

場所・千代田放送会館3階会議室

出席者・石橋冠、伊藤雅浩、隈部紀生、

河野尚行、鈴木嘉一、菅野高実、鈴木典之、

千葉邦彦、西村与志木、藤久ミネ、逸見京子、

三原治、吉田賢策、渡辺紘史、

書面参加・前川英樹

第45回名作の舞台裏

ドラマ人間模様

『太陽の子〜だのふあ〜』(NHK)

日時・2018年1月13日(土) 13時半

会場・情文ホール(横浜情報文化センター)

出演・中村玉緒、長谷川真弓(出演)、

重森孝子(脚本)、菅野高至(演出)

司会・渡辺紘史(演出・放送人の会)

【番組の概要】

1982年10月17日〜11月14日、全5

回放送。神戸港近くの沖縄料理店「おきなわ亭」が舞台。そこに集まる沖縄出身の人々の「心」を、料理店の娘で、店の人気者ふうちやんの目を通して伝える。心の病に苦しむ父親、片腕を失ったロクさん。ふうちちゃんは、戦争が沖縄の人々に与えた悲しい現実にあづいて行く。原作は児童文学者灰谷健次郎。

渡辺 この5人がそろったのは35年、36年ぶりです。

中村 真弓さんがもう2児のお母さんです。びっくりしました。私なんか使用前使用済みみたいなもので…(笑い)

渡辺 番組を、覧になってのご感想を伺います。

中村 わたしは、綺麗でしたねえ。(笑い)ほんとうに戻りたいです。皺はないし、声は違うし…そういえば、月日の経つのは早いもので…ロケ地の波照間は島に着くといいのだけどそれまでが大変で、今思い出しても気持ちが悪くなる…

長谷川 玉緒さんとお会いしてすぐその話になったんです。波照間へはセスナは飛んでい

るんですが、あのときは石垣島から波照間までチャーター船で、台風が近づいていて、船酔いなんてレベルのものでなくて、ジェットコースターみたいな揺れが3時間続く。玉緒さんの手をずっと掴んでいました。

中村 坊や(キヨシ役の鹿又裕司)なんかぶらぶらで、唸っていた。

サーター・テンブラってわかりますか？安物のお菓子で…



中村 玉緒

渡辺 小麦粉に砂糖を入れて揚げた、ドーナツみたいなものですね。

中村 その時、お土産に、度数の強いお酒を買って帰ったら、主人(勝新太郎さん)に「俺がこんなものを飲むと思うのか」と怒られました。誰も飲んでくれない。皆さんお飲みになりますか？また売っているんですか？

菅野 60度の「どなん」は売っています。

中村 その頃沖縄へのパスポートはもう要らなかつた…

渡辺 72年以前は必要でした。



渡辺 紘史

中村 そうですよ。ただ沖縄には泥棒がない。家に帰っても誰もいない。戸は開けっ放し。

渡辺 住民はお互いに全部知っている、泥棒が入るわけがない。

中村 あの頃、沖縄と言えば、どこかの砂も星の砂と思っていたら、波照間でもちつとも出てこない。星の砂ってどこにあるんです？

長谷川 お土産屋さんにもなかつた。渡辺さん、どこにあつたんですかね。

そういえば、波照間では、夜が真つ暗なんです。真つ暗な夜は初めての体験でした。

中村 島の道は覚えていきます。最南端に行くとうこうはもう日本じゃない。

渡辺 台湾のカツオ工場が見えるんです。波照間には菅野さんとロケハンに行きました。

民宿にはヤモリがいて、テレビで高校野球が中継されていて、昼食のカレーライスの中に入っている豚肉の脂身に検印の青い色がみえ

る。「これが復帰後10年の沖縄だ」と、妙に納得した覚えがあります。

菅野 あの時のチャーター船は高速のいい船なんです。着いたとき天気は曇っていて、ロケはできそうにないと思つて皆さんに「ごめんなさい。今日はロケ中止。宿で休憩してください」と言つた。それから1時間ほどたつて晴れそうになつてきた。宿に駆け込んで「ごめんなさい。ロケやります。」死んだようになつている3人を引つ張り出して、「化粧はいいです。みなさん綺麗です」と…

渡辺 吐いたりして青くなつていたふうちやんに走つてもらつて、ラストシーンが撮れました。そのとき、唯一晴れて夕日がみえた。



中村 今も変わらないかしら。変わつてないなら行きたいですねえ。

長谷川 私は灰谷先生とこの作品以降、いろ

いろいろお世話になったのですが、先生は渡嘉敷島にお家を建てられて、3回ほど伺いました。私の卒論は灰谷健次郎論だったので、取材の名目で先生の家に遊びに行きました。亡くなって12年ちょっとになりますが、沖縄で事件があるたびに率直な発言をなさっていました。今沖縄で事件が起こるたびに灰谷先生はどうかおっしゃるだろうと考えます。

渡辺 話を戻しましょう。重森さんどうぞ。

重森 今回の催しへのお誘いがあった時、「わたしはそんなもの書いていない」と断ったんです。書いたこと。すっかり忘れていた。(一同！)

灰谷さんの本はすごくいいもので、私は一所懸命書きました。でも、この話、最後でお父さんが死にますが、私はどんなドラマでも人が死ぬのを書くのはいやで、いまでもいやです。

男が死ぬのは弱くて情けない。

中村 今は女が強過ぎていやね。

重村 戦争に負けて、心を病んで死ぬなんて馬鹿な男だと思って、考えるのをやめた。それで書いたのを忘れたのかもしれない。今度映像を持ってきて見せられて納得しました。この時期とても忙しかった。2年で80本くらい書いたと思います。

渡辺 80年に「3年B組金八先生」、81年に有名な映画「泥の河」、81年には「2年B組仙八先生」が54本、その間に玉緒さん主演の「走れ！デリア俊子」、「生きてん、母ちゃん！」など、1週間に1本ずつ、お書きになっていた勘定になりますね。

重森 玉緒ちゃん、あなたニューヨークで走ったことがあるでしょう。

中村 「走れ！デリア」ですね。はい、走りました。走りました。

重森 この人、なんとという人なんだろうと思っただ。知らないところにどんどん入って行くし、監督に言われると「はい、走ります」って、さつと洋服を脱いで走り出した。それから走った、走った。あのような連れ合い(勝新太郎さん)と一緒に強くなるのですね。

中村 主人はぐちゃぐちゃでしたから、妻がよく見えるんですね。(笑)そうするとやっぱり悪い男を持ったほうがいいのかもしれないね。

重森 いやいや、そんなことはない。

中村 わたしは仲のいいのがいい。真弓さんはどんな旦那様ですか？

長谷川 ごく普通です。だからダメなのかしら。子どもは「太陽の子」の最後の台詞の通り男の子と女の子です。(拍手)



中村 お父さん役の井川さんはまじめな方でしたね。NHKのスタジオで、待ちの時間、

しんきくさいなあと思って、ぐちゃぐちゃ喋っている、井川さんは「何ですか、この遅れは！」と。(笑)

長谷川 とつてもやさしい方なんですけど…

中村 曲がったことが嫌いなんです。あんなマジメにしていたらくたびれます。(笑)

渡辺 そんなたぐさんの個性が集まってドラマはできるんですね。

話を戻して企画のいきさつを…

菅野 理論社という出版社が出した「太陽の子」という本は、児童文学で学校の課題図書にもなり、ベストセラーになりました。僕がラジオ班でラジオドラマを作っているときに理論社の社長と知り合いになり、「これまでで一番皆さんに読んで欲しい本を出した」と本を送って貰った。これはテレビドラマにしたいと企画を出したのですが、動きが遅くてMBSで単発のドラマになり、映画に版權もとられて、しばらく置くことになりました。その後僕は朝のテレビ小説の徒弟奉公をして、次には「鞍馬天狗」など連続時代劇の担当になるはずだったのですが、たまたま「太陽の子」の企画があったので、企画ごと「太陽の子」の企画が戻りました。沖縄は大学1年生のとき1か月ほどぼろぼろと遊んで、そこでいろんな本を買ったのを資料としていくつか使いました。

渡辺 私は名古屋赴任で少年ドラマをやっていました。少年ドラマに人気があったところで、東京ではミステリー中心、名古屋では社会性のあるものやろうと、オールフィルムで作ったりもしました。74年に、灰谷さんの「兎の目」が出たとき「これを少年ドラマでやりたい」と提案し、76年に制作されましたが、

私はその前に東京転勤になり、大河ドラマなど時代劇を続けてやり、「人間模様」の班でいくつかの番組を担当していた時に、「お前、演出をやれ」と言われたのが沖縄復帰10年を意識した「太陽の子」でした。その頃玉緒さんは「続・事件」に出ておられて、いいお母さんだなと思っていたころです。

中村 もう子ども二人生んでましたから。

渡辺 菅野さんが言われたように、この作品の前に映画が作られた。監督は、重森さんの事実上のパートナー、浦山桐郎監督です。「ギューポラのある街」「非行少女」「わたしの棄てた女」などで有名です。その浦山監督とあいだに生まれた女の子さんがフウちゃんと同じ11歳のとき、重森さんはこの脚本を書かれた。そのとき、浦山さんが「太陽の子」の映画を作ったのはご存知だったのですか？

藤森 全然知らなかったのです。あの人は私が脚本を書いたのを知って、「お前は戦争をどう思っているのだ！あんなもの書くな！」と激怒した。

渡辺 映画は監督のこだわりでできているところがありますね。

重森 「お前は勝手なことをした」と彼は怒ったのですが、私が彼に縛られる謂れはない。以前、彼は「それより俺の子どもを生め！お前は一所懸命やるけど、いずれお金もなくなつて、一人になる。そのときのために女の子を生め」と言う。「なにそー」と思いました。お酒ばかり飲んでいて、いずれ早く死ぬと自分でも思っていたんですね。死ぬちよつと前にさよならを言いに来たんですが、私にはそれがわからなかった。しまった、と思いつけました。一所懸命言ってくれたのを私はみつけれ

られなかった。やっぱりあの男が好きです。
(拍手)

渡辺 そういう修羅の中、毎週1本ずつ書いていたから、書いた作品をお忘れになるのも無理はない。

中村 脚本を書くのはもう大変で、大変で、もういいとおっしゃるので、わたしは「いやいや、そう言わずにいっぱい書いてください」とお願いしたところです。書くことはいっぱいあると思います。

重森 あります。彼が死ぬ前に「これを読め」と持ってきた一抱えもあるノートにはみんな私のことが書いてあった。ひどいことも書いてあるのだけど、それを仕上げなくてはやりきれない。「お前はダメな女だ」と言いながら置いてってくれたものです。

渡辺 いいお話、ありがとうございます。ところで、重森さんが先ほど男が死ぬのは嫌だとおっしゃったのですが、原作では梁に首を吊って死ぬ。僕らはそうしなくなかった。精神病院へ勉強に行きました。

菅野 八王子の「丘の上病院」の院長が原作を読んで、「鬱では自殺しません」、「精神科の専門医に相談してから出版なさったら良かったのに」とおっしゃった。それでフウちゃんとお父さんはどう別れたらいいだろうかと考えてあのシーンにした。戦争などの心の傷が長く引きずることを今では誰もがPTSDとして知っていますが、当時は言葉そのものもまだ知られてなくて、一から院長に教わりました。最終回は僕も久しぶりにみましたがとても良くできています。(拍手) あれは誰が考えたのですか？



渡辺 家の中ではなく、港で死ぬのは海に誘われるというか、沖縄のニライカナイ、海の向こうから神様がやってきて、魂は海の向こうへ帰って行くというイメージ、フウちゃんに「生きる」というメッセージを送ろうと考えた。そんな話を重森さんとして、その思いは実現しましたね。このドラマはお父さんとフウちゃんではなく、お母さんとふうちやんのドラマにしたいと思っていたので、うまい展開になりました。そんなこと思っていたんですよね？

重森 思っていたけどちゃんと書いていたかどうか。それより私は、お父さんが亡くなったとき「早く焼香をきなさい」と言う玉緒さんの顔がほんとに凄いなあと思った。ずっと長くみている顔ですね。あれを見て書いて良かったと思った。

中村 わたしはあのころまだ実生活では経験したことのない、わからないことでした。

あのころスタジオではみんなまとまっていましてね。今なかなかないことです。

長谷川 ファミリーという感じで…

渡辺 キャスティングの話します。フウちゃん役は、オーディションでした。はじめ1月に予定されていましたが、僕が他の番組の仕事があつて2月にずらした。そんな時、1月30日に長谷川さんが出ていたテレビドラマを見た「飾りのついた麦わら帽子」というタイトルです。長谷川さんは麦藁帽子をかぶった可愛い女の子の役で、小さいけど意思が強く、生意気そうで健気で、「禁じられた遊び」の子役、ブリジッド・フォッセーのイメージだった。映画もMBSのドラマもフウちゃんは大柄でまさに太陽の子らしく大きい子だったが、しかし健気で一所懸命に沖縄のことやお父さんのことを知ろうとする役には、むしろ小柄な方がいいと思つて、オーディションの時には、私の気持ちは決まっていた。1月にオーディションをしていたら、フウちゃん役は別の人だったかもしれない。

長谷川 皆さんに可愛がっていただきました。
渡辺 神戸ロケの話しましょう。

長谷川 神戸ロケが1週間か10日あるのを東京から一人で行きました。ちょうどその時学校の修学旅行があつて、それに行けないのが悲しくて、悲しくて…今思うと日光への1泊旅行でたいしたことではないのですが…

それから半日くらいお休みがあつてどうしても見たかった映画「ブッシュマン」を二人でこっそり見に行きました。帰ってくるまでギンちゃん役の赤塚真人さんに猛烈に叱られた。「そんなことをしちゃいけない。誰にも言わずに行つたらみんな凄く心配したんだ。お

前がいなくなつたらこの現場はどうなるんだ！」と。叱られて役者として学ばせていただきました。

中村 私はあのころ京都からNHKに通つていたんです。ホテル暮らしで。

長谷川 私、神戸ロケで、玉緒さんが神戸弁に苦労なさっていたのを覚えてます。

中村 関西の人はタクシーのことをタクシーと言います。京都で「×××」と言うのは舞妓さんだけです。これは話が脇へそれてしまいました。

長谷川 私は「秘密のアッコちゃん」の声をやってらした太田叔子さんに約1カ月、細かく指導していただきました。

菅野 玉緒さんと内藤(剛志)さんが関西です。



中村 あと岸部一徳さん。

でも女優になったとき「関西弁を忘れる」と言われた。撮影所は京都だから、監督が〇

Kしても、東京の俳優さんから「訛っていません」と指摘されることがある。そんなこともあって関西弁を忘れると言われた。

長谷川 私は山口県の生まれなので、うっかりするとアクセント、イントネーションを間違えます。

菅野 あの頃の「人間模様」の班は人手が足らなかつた。神戸の船着き場で母と娘二人が語るシーンは朝4時開始の日で、ずっと撮影が続いていた。11時半ごろ、井川さんが近所の市場で買った菓子パンと牛乳を持って歩いてくる。それで「そうだ俺たちメシも食わないでやっていたんだ」とわかつた。朝飯を買いに行く人手もいなかつた。

長谷川 玉緒さんと市場の定食屋で食べたことがあります。

菅野 方言指導の太田さんにフウちゃんの親代わりをお願いしていたのだけど、一人で遊びに行つちやうのだからその必要はなかつた。
渡辺 僕は子役さんとのつきあいは多いのだけど、フウちゃんの子役イメージでなく、一人の俳優さんと認識していた。

中村 夜何時まででもよかつたんですか？いまは児童保護法とかで夜中はできませんでしょう？

渡辺 いまは働き方改革とかいって残業にうるさくなっていますが、あのころは夜中までやっていましたね。

菅野 この番組はまだチーフとか管理職とかの肩書のないペーペーの若造がやっている番組なので予算が少ないんです。

渡辺 今はどの放送局もドラマ作りは局のイメージ作り、スポンサーのイメージ作りのためのイベント化していますから、安い予算で

作ることができなくなっています。あの頃は手を挙げて「これやりたい」というと、やれたものです。

菅野 そうとも言えない。「人間模様」のチーフプロデューサーは視聴率を気にしていた。ただ、当時は向田邦子、早坂暁、山田太一という必ず当たる作家がいて、そのほかは好き勝手な作品が作られた。若い僕らはそれで挑戦できました。

中村 その頃重森先生は寝る間も惜しんで書いておられたんでしょう？

重森 嫌だ、書けないとは言えなかつた。ユウちゃん（浦山桐郎）は「腕で書け。こちらは心臓、こちらは腎臓、こつちじゃなくて腕で書け」と言う。子どもが生まれたばかりで、ユウちゃんはお酒飲んで、私はそのそばで書いていました。そうやって腕で書いていたら、ある日、器械（パソコン）を使えという。誰か一人ぐらい機械は使わないという人がいるだろうと思つたがみんな器械になつちやつた。いまさら腕を使わずに書けと言われたつて書けない。でも書けと言われたら書きます。（拍手）

渡辺 時代を表すお話、ありがとうございます。ここで腰の具合が悪いということで、本日ご出席いただけなかつた井川比佐志さんからメッセージを頂きました。紹介します。

公開セミナーに参加できないこと、お詫び致します。それにしても「太陽の子」放映から35年も経つたのに、沖繩の現実はいまも変わっていませんね。米軍の基地と沖繩に生きる

人々の問題は解決されません。

米軍によるさまざまな傲慢な対応、日本政府の及び腰の外交、報道されない米軍の膨大な事件事故、沖繩の過剰な基地負担は明らかなのに、一部の人々による心ない批判。

戦争は終わつても、戦後は終わらない。お父さんのように「太陽の子」に描かれたフウちゃんや青年たちはまっすぐに大人になつて行つてほしい。

戦争とは無縁の、日本の未来の地図を正確に描いてほしいと願います。

当日のゲストに玉緒さん、真弓さんが参加なさる由、とてもうれいいます。（拍手）

渡辺 最後に会場から質問を伺います。

会場からの質問1 楽しいお話ありがとうございます。35年前のドラマですがよく覚えています。重森さんがお父さんが死ぬのは不本意だと言つておられました。当時中学生だった私も「何故お父さんを死なせるのだ」と抗議文を書いた記憶があります。スタッフの方の考えはわかりましたが、演じた中村さん長谷川さんはどうお感じになつたのでしょうか？

中村 私も亡くなるとは思っていませんでした。強い人ですから。でも、強い人ほど弱いのかしら、とそんな気がしました。わかりますか？自分も「泣いちゃいけない、泣いちゃいけないんだ」という芝居をした気がします。

長谷川 当時11歳だったのでドラマの中でお父さんが死ぬことがどうかということは考えなかつたのですが、今改めて、ドラマとしてはこれもありだなと思ひました。

会場からの質問2 今日番組をみて、神戸の震災はこの後だつたのだと思ひました。波照間は僕も行ったことがありますがこのあと変わったと思ひます。長谷川さんは、見てすぐフウちゃんと思ひましたが、岸部一徳さんも役者になつたばかりのころでしょう。

長谷川 ちょうどタイガースの復活コンサートがあつて、LPにメンバー全員のサインをいただきました。いまもよく「フウちゃん」と呼ばれます。いまだにあれを越えられないのか情けないと思ひますが、あの作品がなければ俳優を続けていなかつたと思ひます。

会場2 玉緒さん、星の砂は武富島です。砂ではなく虫（軍細胞生物有孔虫）の死骸です。
中村 わたし、虫はきらいや。だけど武富島行きます。



会場・客席

渡辺 皆さん、ありがとうございます。ではこれで終わります。

第66回放送人句会

平成29年12月13日(水)

於：赤坂・麦屋

選者：星野高士

出席：伊藤視郎、荻野慶人、西川阿舟、

新村もとを、林備後、佐々木光野、深尾一化、

近藤久二(9名)◇不在投句：鶴橋康夫

兼題：鱈、狩、息白し、特番(業界用語)

【星野高士特選】

糶箱に残りし鱈の見目容チ

備後

息白し京都太秦孤独です

康夫

特番の晴着のまんま忘年会

慶人

老友は鱈鍋越しに酒を注ぐ

久二

年越しの特番は早や床の中

一化

似た人と思うて過ぎし息白く

康夫

猟銃を磨くランプの暗きかな

視郎

民宿を兼ねたる狩宿に泊る

阿舟

【星野高士選】

俳優のフォーム素晴し息白く

阿舟

弓を張るフオートスタジオの狩姿

慶人

鱈鍋のまわりに酒はこぼしけり

視郎

狩犬が茶色に吠えるブリューゲル

久二

狩の場の獣に返る血の滾り

一化

猟銃のつめたく森にかすかな音

視郎

無縁坂上る女の息白し

備後

海士小屋に海老逼塞す息白し

久二

朝いちのティーショットふぁー息白し

光野

ほどほどのしあわせたなと息白し

康夫

礼拝堂斜光輝き息白し

もとを

山の神へ銃で挨拶猟期来る

もとを

鱈汁を食ふべし外は雨の音

阿舟

狩人や大胆にして細心と

鍋を出て椀の中なり鱈白く

玄界灘鱈は怪魚に変身す

息白しあえて髪切る女いて

熊狩の名人堅く太き腕

遠吠えの天を突き刺す息白し

鱈ちりの母惚けるる白さかな

狩人が腑分けを語る通夜の酒

修行僧息白く朝の下駄音

鱈船に俄か賑ふ根至港

途中下車築地市場でつまみ鱈

チゲ鍋の池にもがくや鱈の白

救え日や特番残業百時間

光野

阿舟

視郎

康夫

光野

一化

一化

久二

もとを

もとを

慶人

一化

視郎

【会員互選】

彼の国は王女もすなる狐狩

カシオペア天狼星リゲル息白し

納豆売高く呼ばひて息白く

マラソンの息白煙の如く過ぐ

被災地に捨てられし馬息白し

樹林帯抜けて稜線息白し

坂上る鞍馬の息や白かりき

眼も見ずに掌を繋ぎかれて息白し

声変わりして「おはよう」の息白し

妹の朝刊くぼり息白し

駅伝の首位争ひや息白し

狩る狩らる狂気が駆ける尾根伝ひ

特番や熊の檻にコメディアン

特番の夜鱈汁を啜る夜

【選者吟】

狩宿の主は出掛けたままと言ふ

鱈鍋や嘘も本当になりし夜

Nスへの画面も息の白かりし

息白く宮司の通ふ馬場の道

狩犬の立ち止まりたる疎林かな

白息の届きさうなる市場の魚

行年の特番よりも歌謡もの

備後

光野

もとを

もとを

視郎

備後

備後

久二

視郎

光野

阿舟

一化

慶人

備後

星野

高士

次回放送人句会

○平成30年2月13日(水) 18時頃から、投句締切19時

○会場：未定

○兼題：残雪、芽吹く、海苔、顔合はせ(業界用語)

界用語

第15回 人気番組メモリー

世界ふしぎ

発見!

日時 2月24日(土) 13時半

場所 情文ホール



ゲスト

草野仁(司会)

竹内海南江(ミステリーハンター)

重延浩(プロデューサー)

入場無料

会員で入場ご希望の方は放送人の会事務局へご連絡ください。

いろはに時代劇 その貳拾壱

菅野高至

「清左衛門残日録」の95年正月時代劇のマドンナを浅丘ルリ子さんと、最初に言い出したのは脚本の竹山洋である。40年生れだから、当時は54歳で、清左衛門の恋心を刺激するにはまさに適齢のいい女優だった。浅丘ルリ子の名を聞いて思い出すのは、爪と手の甲のひっかき傷である……。

75年の9月、ぼくは赴任地の山口放送局から東京のドラマに上がって、大河ドラマ「元禄太平記」のチームに入り、アシスタント修業を始める。原作は南條範夫、脚本は小野田勇、主演は石坂浩二、柳沢吉保から見た赤穂事件（忠臣蔵）を描くものであった。本数は全52回、何という勤勉さだろうか、一週休みの無く、最終回は12月28日の放送であった。今より役者のスケジュールがタイトでは無かったとは言え、キャストの抑えは、さぞかし大変だったろうと想像する。

プロデューサーは古賀龍一。不思議な人で、僕には未だに謎の人物である。彼の出局は試写のある月曜日以外は、午後4時頃にドラマの部屋にふらりと現れる。必ず、東急デパートの紙袋を提げている。贈答品らしいが、定かでは無い。某大物政治家ともゆかりがあり、お金には不自由しない……と言われている。

確かなことは、ナベプロ（渡辺プロダクシ

ョン）を初め役者の事務所が強かったことだ。大河も終盤になると、レギュラーやセミレギュラーの中から芝居場が無かったと愚痴をこぼす役者も出て来る。そんな役者たちをスタジオの化粧前で、巧に言いくるめて宥める姿を見掛けるようになる。

そして、夕方の6時近くになると、麻雀が好きな古賀は、元禄の班員をふくめて二組の面子を組閣し、NHK近くの雀荘で麻雀を始める。麻雀が出来る者を意図的に集めたのか、プロデューサーの仕事は何時しているんだろうか、まだドラマに馴染んでいない僕には謎だらけだった。

最終週の収録が近くになって、ある夜、主役の石坂さんの招待で麻雀大会が開かれる。会場は石坂邸で、麻雀の出来ない者はトランプのドボンで遊ぶ。妻の浅丘ルリ子さんも麻雀に入る。「大女優と一緒だ！」と喜んだのも束の間、浅丘さんの長い爪に一晚中、悩まされることになる。牌をかき混ぜるたびに、彼女の長い爪が手の甲に引っ掛かって痛いのだ。思わず手を引っ込めっていると、「新人！ サボらないでかき混ぜる！」と先輩にからかわれる。僕は新人、逆らえずに痛みに耐えることになる。

以来、浅丘ルリ子の名を聞くと、あの夜のひっかき傷を思い出して思わず手を引っ込めしてしまうのである。

大河の収録がすべて終わり、仕上げの編集も終わる頃、古賀龍一から元禄のドラマ部ス

タッフ全員に特別招集がかかる。熱海の別荘で打ち上げをする、身一つで来るべし、と。次の大河の準備で忙しいのに、断れないのか？先輩に聞くと、温泉に入って麻雀をしようまい魚を食べ、又麻雀をする、それだけだから行くべし、と言っ。

贅を尽くした別荘には檜の大きな風呂があった。東京から呼んだ板前に作らせた、美味しい料理もそこそこに麻雀が始まる。この日の経費はすべて、彼のポケットマネーからだった。夜明け間近、麻雀もお開きになり、温泉に浸かりながら、こんなプロデューサーがいるドラマ部とは想像を絶する魔界だと、僕は幾分か脅えていた。

遊びばかりでは無く、彼から字んだ大きなことがひとつある。「プロデューサーはスタッフを守る」という鉄則だった。

或る日、オーディションルームで試写の後感想を述べ合う時に、ある部長が「演出が違っ、間違っている」と指摘した。演出は若いディレクターだったが、古賀は立ち所に反論した。「演出に間違いは無い、ホンの読み方も正しい、貴方こそ間違っている！なぜなら……」。相手に言葉を差し挟む余地すら与えずに反論し、彼の口を封じる。その見舞にドラマ部長が議論を引き取り、オーディションはお開きになる。

彼の言い分は、若い演出を育てるためには、少々間違えたくらいで、「鬼の首を取ったような大声を出しなさんな！間違えて覚

えることが大事なんだ」と言うこと。

麻雀命の不思議なプロデューサーから、「チームを守る」鉄則を学ぶ。後年、出世大事の上司や、組織の軋轢の煽りで、理不尽な目に遭った時に、チーム（スタッフキャスト）を守ろうとした彼を思い出して、自戒する。僕はチームを守っているか？と。

後に、僕も「忠臣蔵」を大河でやらざるを得なくなるのだが、この時の台本担当の渋谷康生の座右の書は、真山青果の「元禄忠臣蔵」であった。

浅丘さんと、仕事をする機会は一年後にやってくる。76年の秋、大河ドラマ「花神」の準備が始まる。赴任地の山口が舞台とあつて、僕は望んで「花神」班に入り、FDチーフで考証担当になる。司馬遼太郎原作、大野靖子脚本。15作目の大河で、最後の全52回作品だった。主人公は周防の村医者・村田蔵六から倒幕司令官になり日本の近代軍制の創始者となる大村益次郎、キャストは中村梅之助、地味な蔵六を囲むように、松下村塾の吉田松陰（篠田三郎）や奇兵隊の高杉晋作（中村雅俊）などを配して、維新回天の青春群像劇が展開する。

浅丘さんは村田蔵六の弟子で、シーボルトの娘・楠本イネの役であった。史実では1827年生れ。3歳年上の蔵六への仄かな想いは終生通じることにはなかった……。

（続く）

連載 放送とはメディアである

「放送人の会 会報をめぐって」

松尾幸一

民間放送は先行の日本放送協会（通称NHK）に伍して1951年に生まれた。

勿論中波ラジオだ。テレビはまだ無い。試行錯誤だったが郵政省は片っ端から免許を与えた。当時マスコミといえば大手新聞か大手出版社を指していた。週刊誌も週刊朝日とサデー毎日など新聞社系の付属雑誌のみ。大手出版社系の週刊新潮と週刊文春の発行は昭和30年代のはじめ頃だった。

文系の大学生は就職時期には新聞記者か大手出版の編集部（例えば講談社、文春、岩波）に殺到し、大半が落ちた。「ラジオがあるぞ」と誰かが言った。昭和28年、発足当初から「映像ジャーナリズム」の風貌を要していたテレビの影におびえていた筆者は斜陽のラジオに入社。

しかし、NHKだって大手新聞や大手出版並みの見識があって「マスコミミーム」的な学生など相手にしない。そんな時代に就職浪人だったある学生はカストリ紙質の2・3流の雑誌編集部にもぐりこんだ。そこでエログロの妖しげな記事でも書くか、それとも故郷に帰って地方新聞のラジオ欄の埋め草記事にでも手を染めるか、つてを頼って乱立したばかりの地方局に入社するか、どっちにする「都落ち」した文系学生は地方文化の礎となったようだ。

そんな経歴を持つ一人の才人が居た。民放連の「放送文化研究所長」野崎茂（故人）で

ある。彼は編成人不在の民間放送に危機感を抱き、全国のオール民放の編成人に声をかけて、すでに放送ジャーナリズムにのりだしていた学者や評論家、代理店などの放送周辺の業界人の組織化を図り活字ジャーナリズムとは異なる映像ジャーナリズムの可能性を模索し、メディアの影を意識、「放送とは言論である前にメディアである」と最初に主張した人である。しかし、民放連を牛耳っていた東阪の「社長会」は放送局の経営に懸命ではあっても放送の文化性には一般的に無知であった。（続く）

（放送人の会特別顧問）

メディアがそれぞれの特性を忘

れた時代？

富澤一誠

音楽評論家としての私の正式なデビューは、1971年10月25日に発売されたフオークソング専門誌「新譜ジャーナル」（11月号）だった。そのとき掲載された論文は、いきなり投稿した私にとつての処女評論（俺らいちぬけたくないよ、岡林さん）だった。私の評論は「私の音楽論」という読者のページに掲載された。これが掲載されると編集部宛に読者から賛否両論たくさんハガキが寄せられた。編集部は色めきたった。若い書き手がいなかったたので、その後、私が重宝がられることになる。その意味では、きわめてラッキーなスタートだったと言えるだろう。早いものであれから46年という年月が経ち47年目に入ろうとしている。

音楽評論家としてスタートするにあたりひとつ自分に課したことがある。それは著名人

りの原稿しか書かないことだ。結果的にスタートしてから20年間、私は新聞、雑誌を中心に著名人りの原稿しか書かなかった。単行本も20年間で40冊程書きあげることができた。ラッキーと言うしかない。

書き始めて20年を迎えた頃、転機がやってきた。書き始めて20年を迎え、そろそろ自分の「使命」を考えざるをえなくなったかもしれない。いや、40代になって、自分の人生の今後を冷静に見つめなければならぬという現実があったからである。いろいろな試行錯誤を重ねて私が出した結論は、自分が今やらなければならぬ、と思っていることをすべきた、ということだった。ミュージック・シーンの中に身を置いていて、感じる矛盾。その矛盾はどうしたら克服できるのか？ 評論家として、思ったこと、感じることを、これまで以上にズバリと書かなければ、と考えた。やがて、このことが「評論の実践」ということになる。

音楽評論家はこうあるべきだということを「評論」で書く。それに刺激を受けてラジオやテレビの制作者が番組を作ってくれたら、それは評論家冥利につきるというもの。しかし、現実には笛吹けど踊らず、である。そんなときどうする？ 「ふたつたら俺がやってやる」と思い、私は「評論の実践」に入ってしまったのである。それが「活字の世界」からラジオ、テレビという「放送の世界」へ入ったきっかけだ。

ラジオは92年4月からFM NACK5で「JAPANESE DREAM」という番組を始めた。14年間続いた。続く「ウィークエンドパーティー」が3年続き、そして「A

ge Free Music」と衣替えて現在まで9年間続いている。

テレビの方は、「音楽通信」（テレビ東京）が97年4月にスタートし4年半続き、2000年4月にスタートした「Mの黙示録」（テレビ朝日）も4年半続いた。そして今（あの年の歌い時代が刻んだ名曲たち）（BS JAPAN）は14年4月にスタートして4年間続いている。

振り返ってみると、前半の20年間は活字、後半の20数年間は「放送」をメインにして私は評論活動を続けてきたことになる。そして今、私が思っていることは「メディアの特性」ということだ。

最近のメディアを眺めていると、メディアの特性を忘れてしまっていないか、と心配になる。ラジオになりたい活字、テレビになりたいラジオ、活字になりたいテレビ、という構図が見えて仕方がないからである。

メディアが、そのメディアの特性を忘れてしまったら、いかがなものか？ である。活字媒体は、言葉で音楽は語れない、ということを知っている。だからこそ、曲の良さを語るために、その曲を作ったつてっているアーティスト本人の生きざまに肉薄することで、その良さを伝える表現方法を考え出したのだ。ラジオは歌を聴かせられる媒体だ。特にFMはフルコーラスでじっくりと曲をかけられるし、アルバム紹介もできるはず。ところが、いつのまにかFMがAM化したことにより、曲を聴かせることよりも、しゃべりの方の比重が大きくなってしまっている。

テレビは映像で人々に訴えるメディアのはずだ。衝撃的な映像に言葉はいらぬ。それ

なのに、醜いテロップが入ることによって、映像の良さが減少してしまう。このことにテレビの作り手は気づいているのだろうか？

ラジオになりたい活字、テレビになりたいラジオ、活字になりたいテレビ、というのが今の三天メディアの相関係数だが、私はこの構図では、それぞれのメディアの特性をなくしてしまおうと危惧している。では、メディアの特性をさらに生かすためには、どうしたらいいのだろうか？ 私は今のメディアの相関係数を逆をいったほうがいい、と思っている。つまり、活字のテレビ化、テレビのラジオ化、ラジオの活字化だ。

具体的に言うところなる。

① 活字のテレビ化とは、活字ぎっしりではなくて、写真を大きく使って見やすくすること。最近の若者たちの活字離れは顕著だ。それをおさえるためには、写真、イラストを使ったり、デザインで「見せる」努力をするということ。テレビ世代の「見る」欲望をとらえる、ということである。

② テレビのラジオ化は、テレビの「見る」という他に「聴く」という特性を最大限に生かす、ということ。テレビは見るものだけに「ながら行動」ができないという欠点がある。テロップはその欠点を増長しているのしか言えない。そこで、「聴かせる」という特性を特化すると、ラジオの「ながら行動」ができるというものだ。テレビは見るだけのものではない。聴く、という特性もあるのである。この特性を生かすためには、ラジオのDJやパーソナリティー的なしやべり方が必要となってくることは、言うまでもない。「聴くテレビ」、これこそテレビの特性を生かす、と

いうことである。

③ ラジオの活字化は、活字のように徹底的に掘り下げて、しゃべった方がいい、ということ。はつきり言って、ラジオのしゃべりは内容的に中途半端だ。新聞にたとえるならならば、テレビは「見出し」、ラジオが「リード」、活字が「本文」ということになる。ラジオはいくらでもしゃべることができるのだから、新聞の「本文」なみにパーソナリティーがしゃべってもいいはずだ。しゃべって聴かせる。このラジオの特性をもっと生かしたならば、ラジオはこれまで以上におもしろくなると思っ。

隣の芝生はきれいに見えるもの。まずは自分の芝生の特性を生かしたうえで、隣の芝生の良さを取り入れること。そんなことが三天メディアには必要なのではないか？ ラジオになりたい活字、テレビになりたいラジオ、活字になりたいテレビ、まことに笑止千万である。 (音楽評論家)

放送人グランプリ受賞者

延江浩さんの作品を聴く

公開セミナーラジオを楽しもう

放送番組センターが主催する公開セミナー「ラジオを楽しもう」はラジオだからこその出来ること、またその魅力を伝え、より多くの人にラジオに親しんでもらおうとの意図で開催されてきましたが、その7回目が開催されます。今回のテーマは「放送人グランプリ2017」を受賞した延江浩さん(TFM)

が制作し、第13回日本放送文化大賞をはじめ第71回文化庁芸術祭 ラジオ部門優秀賞、第54回ギャラクシー賞、第65回日本民間放送連盟賞、ラジオ教養番組部門優秀賞等、数々の賞を受賞したミュージックドキュメント・井上陽水×ロバートキャンベル「言葉の海に漕ぎ出して」を鑑賞します。

鑑賞後、出演者のロバートキャンベルさんと制作プロデューサーの延江浩さんの二人をゲストに迎えて石井彰さんが番組への思いや制作現場の生の声を伺います。またその後、下記の延江浩さんの作品も鑑賞します

ボブ・ディランノーベル文学賞受賞記念「The Times They Are a Changing」時代は変わる」

開催日 3月17日(土)

時間 13時~16時30分(12時半開場)

会場 横浜情報文化センター

(横浜情報文化センター)

ゲスト ロバートキャンベル

(日本文学研究者)

延江浩(TFM・放送人の会)

司会 石井彰(放送作家・放送人の会)

入場 無料

応募方法 放送ライブラリーホームページ

(<http://www.bpcj.or.jp/>)

ラジオ聞き酒の会 第6回

日時・2月23日(金) 18・30~21・30
場所・パセラリゾーツ新宿靖国通り店
視聴番組
小林克也の番組ダイジェスト

「Funky Friday」〜「Best Hit USA」

CBCラジオ「1/6の群像」

29年度民放連賞教養番組最優秀作品

新入会員紹介(入会日順)

日笠昭彦(ひがさあきひこ) 63年1月生。東京ビデオセンターやオルタスジャパンで情報番組、バラエティー、報道番組などを経験し、29歳でフリーに。中京テレビでは夕方ニュースの総合演出として開局以来初となる年間視聴率1位を3年連続で獲得。2001年、日本テレビと契約。以後14年間、「NNNDキュメント」を600本以上プロデュース。民放連賞、ギャラクシー賞など受賞作多数。現在LLC「創造の森」代表プロデューサー。光原朋秀(みつはらともひで) 77年9月生。2011年番組制作プロダクションmk5を設立。現在「ガッテン(元ためしてガッテン)」の演出、「人名探求バラエティー日本人のおなまえ!」のプロデュース、演出を担当。高沢一誠(とみざわいっせい) 51年4月生。71年、音楽誌への投稿を機に音楽評論活動に専念。著書に「フォーク名曲事典」「J・POP名曲事典300曲」など多数。<Age Free Music>(FMNACKS)、<Age Free Music>大人の音楽<>(JFK系全国FM34局ネット)、<あの年この年>(BS JAPAN)などのパーソナリティー&コメンテーター。

【あ】藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 【え】江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤雅充 【お】大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大沢悠里 大多亮 太田昌宏 大原れいこ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小河源正巳 沖野暲 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金沢敏子 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚德 【き】北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木村成忠 【く】工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】崔銀姫 千葉邦彦 【つ】塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 富沢一誠 豊原隆太郎 【な】長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村芙美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】信井文夫 延江浩 【は】萩原豊 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】逸見京子 【ほ】堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 南謙 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鏡一 三宅恭次 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記

▼松の内に富山湾の旬の魚を味わいに案内され、漁場直結の民宿で名にし負う美味を堪能。奇跡のような快晴、温暖にもビックリ。帰ったその夜から爆弾低気圧の雪嵐。この幸先の良さが年間続くことを祈るや切。新湊一帯は、到るところ石橋監督映画『人生の約束』の余韻に満ちていて、豊かな伝統文化への誇りの熱さにも圧倒されました。(典)

▼放送人グランプリ下馬評座談会から発行日までスケジュールがきついなと思っていましたが、皆さんからの原稿が早く届いたおかげで何とか間に合いました。テープ起こしの作業が遅くなっていると痛感しますが、それはもっぱら気力の衰えで、根を詰めてできなくなっています。どなたか私めに気合を入れてください▼2月3日(土) Eテレで「地方の時代映像祭」のシンポジウムが放送されました。出席者を見ると「下馬評座談会」で出てきてしかるべき名前がありましたので記録しておきます。司会は吉岡忍(日本ペンクラブ会長、以下佐々木健(NHKエデュケーショナル)、高橋弘樹(テレ東)「家」について行っていた「すか」のP)、小田玲奈(NTV)、「帰ってきた家売る女」ウチの夫は仕事ができない、「地味にスゴい!校閲ガール」河野悦子などのP)、土方宏史(東海テレビ、映画「ヤクザと憲法」の監督)です。シンポジウムの内容を紹介するスペースがありませんが、好きだから作る、作りたくて作る場所にしかテレビの未来はない」との意見に全真賛意を表していたのが印象に残りました▼「インパール」の話が出ると「輜重輸卒が兵隊ならば喋々

トンボも鳥のうち」というざれ歌が出てくるのですが、輜重輸卒というのは日露戦争までの言葉で「インパール」のときは輜重兵、輜重特務兵と言葉と制度が改められています。一応兵站の重要性を重上層部は認識していたわけですが、やはり輜重兵は軽視され、現地調達は現実的には絶望的に困難でした。ざれ

歌はこの後「焼いた魚が泳ぎだし、電信柱に花が咲き、絵にかいた達磨が踊りだす、踊りだす」と続きます。都都逸やデカンショ節のメロディーで歌われ、さらには歌詞の冒頭が「もしもわが校負けたなら」と変えられ、唱歌「花咲じい」のメロディーでちよつと品の悪い応援歌として歌われています▼今号から印刷所をコピー店のMBE (Mail Box etc) からKinokoに変えました。MBEが転居して使いにくくなったためですが、KinokoではSDカードなどで持参したデータをコピー機が直接読み取ってプリントするので画質がよくならずはまずです。会報の1号から7号までは昔ながらの活版印刷で作っていましたが、タフroid版の2ページで10数万円という印刷費なので、8号からパソコンで作った完全原稿をプリントアウトしてコピー機で印刷する形に変え、3万円程度の印刷費になりました。それから17年、その間にカメラはフィルムからデジカメに変わり、紙焼きをの写真をコピーする時代ではなくなり、パソコンも進化しました▼2月9日会報の発行日は平昌オリンピックの開会式の日です。会報の発送作業は夕方には終わりますので、午後8時からの開会式中継をみるためさつさと帰宅します (視郎)